提　言　書

～いわて文化支援ネットワークの活動から～

『震災から7年　被災地に新たなコミュニティを生む』

目次

Ⅰ はじめに …… 2

Ⅱ 活動報告

次世代育成によるコミュニティ形成事業

こども劇団みやこデイジーの育成 …… 4

子ども劇団の交流推進 …… 4

子どもアーティストのアウトリーチ育成と交流推進 …… 5

美術を通じたコミュニティ形成事業

沿岸での市民協同型美術ワークショップ･展示発表の支援 … 5

市民参加によるコミュニティ形成事業

みやこ市民劇の立ち上げ支援 …… 7

「いわて震災詩歌2018」の発行 …… 8

「いわて文化復興支援フォーラム」開催 …… 8

みやこ市民劇第一回公演来場者･参加者アンケート調査 ……10

Ⅲ いわて文化復興支援フォーラム

第一部 いわて震災短歌2018 優秀作品授賞式……14
朗詠劇～公募震災短歌から～

第二部 ディスカッション……16
「文化芸術の市民参加とコミュニティ形成」

Ⅳ 市民参加の舞台づくりにかかる
アンケート調査集計結果報告

・都道府県からの回答 ……28

・実施団体からの回答 ……30

Ⅴ 現地の声

ジュニアアンサンブルみやこの活動について ……36

2018年1月に行ったワークショップを通して ……38

みやこ市民劇について ……41

歌集「いわて震災詩歌2018」の選考に当たって ……44

Ⅵ まとめ「コミュニティの復活と語り継ぐ力」 ……48

Ⅰ はじめに

はじめに

例年3月11日は、新聞やテレビで特集や特別番組が組まれ、さまざまな角度から復興の進捗や諸々の課題が報じられます。そして、犠牲になられた方々への鎮魂の祈りを捧げるとともに、「あの日」を忘れまいと、官民あげて多くのイベントが行われます。

いわてアートサポートセンターでも毎年、この時期になると「いわて文化復興支援フォーラム」を開催します。今年は、「震災詩の朗読劇」に引き続き、震災短歌を公募し、歌集の発行に合わせ「短歌朗詠劇」を上演しました。素敵なピアノ演奏と心打つ短歌の朗詠に、会場内は涙で溢れました。

「頑張れという励ましに言葉呑むもうこれ以上頑張れません」(清水恭子)。朗詠劇冒頭で読まれる短歌です。震災直後、何度となくかけられた言葉です。震災に打ちのめされ悲嘆にくれている人にとっては、辛く切ない励ましの言葉でもあります。7年たっても、その悲しみは消えていません。

朗詠劇の最初、この言葉が発せられたとたん、すすり泣きが聞こえてきました。心情を短くまとめ、研ぎ澄まされた言葉とする短歌や詩などの表現は、「風化」という言葉とは無縁のように胸を打ちます。

人々に深く沈降する思いを解き放つために、文化芸術は、これからこそが重要で不可欠な役割を担っていくものと思います。

一昨年度の提言書で、私は、時の経過とともに、記憶が薄れがちになるという自戒もこめて「文化芸術は、その『記憶』を表現として再創造する役割を担っている」と記し、昨年度は、生活基盤が整えられ、交通網も整備されていく中で、心のひだに強く張り付いた苦悩と失った命の叫びは、どこに向かえばいいのかと問題を提起し、心の復興は、これからが本番ですと述べました。

今年は、その思いをますます深くするとともに、復興の陰に忘れ去られつつある「あの日」から「今日」までの個々の心の物語にも心を寄せ、文化芸術が、「心の癒し」や「思いの発信」以外にも、わがふるさとや次代を担うべき子どもたちに、新たな役割を果たせるよう挑戦していきたいと思います。

文化芸術は、持続可能な地域づくりのための大切な柱の一つなのです。

平成30年3月11日

特定非営利活動法人いわてアートサポートセンター
理事長　坂田　裕一

Ⅱ 活動報告

活　動　報　告

次世代育成によるコミュニティ形成事業

（1）こども劇団みやこデイジーの育成

参 加 者：小学校２年生～中学校１年生　17名
公　　演：平成29年10月15日（日）
会　　場：宮古市民文化会館　中ホール
第2回公演「ネコが手をかすレストラン」
原　　作　茂市久美子
脚　　本　佐々木芳江
演　　出　畠山　泉
歌唱指導　丸岡千奈美／金野　侑
振付指導　土岐　美野
舞台美術　長内　努
作　　曲　岩澤　美紀
照　　明　須賀原丈二
入場者数：170名

昨年度に設立された“こども劇団みやこデイジー”の今年度の活動は、最初の２カ月間は劇団員募集を兼ねたワークショップを行い、６月からは10月の第２回公演に向けた稽古が始まった。第２回公演「ネコが手をかすレストラン」は宮古市出身の児童文学作家・茂市久美子さんの作品を舞台化したもので、宮古市の市民がボランティアスタッフとして脚本・作曲・照明等を手掛けた。演出をはじめ、歌唱・ダンスの指導は盛岡等から派遣した講師が中心となり、基礎的な技術向上のための練習を行った。

また、10月の公演終了後より“みやこ市民劇”の稽古が開始され、劇団員全員が、平成30年２月11日・12日みやこ市民劇第一回公演「拓け、いのちの道を～鞭牛和尚の挑戦～」に出演した。

（2）子ども劇団の交流推進

日　程：平成29年12月24日（日）
会　場：二戸市民文化会館　大ホール

宮古の“こども劇団みやこデイジー”と二戸の子ども劇団“二戸演劇協会 雲人・アイキッズ”との演劇交流を図るため、“こども劇団みやこデイジー”の劇団員が“二戸演劇協会 雲人・アイキッズ”の公演「銀河鉄道の夜」を観劇。カーテンコールでは舞台に上がり歌の共演を果たした。終演後はお互いに感想を語り合うなど交流を持った。

こども劇団みやこデイジー第2回公演

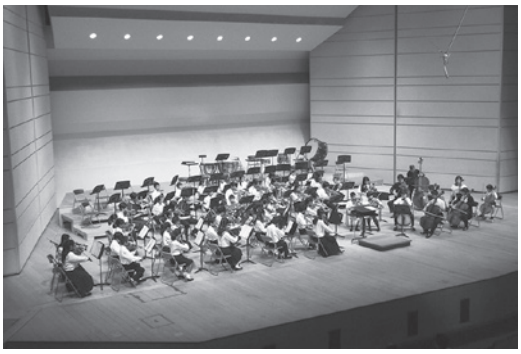
みやこデイジーと二戸の子ども劇団アイキッズの演劇交流

（3）子どもアーティストのアウトリーチ育成と交流推進

岩手県内で通年活動するジュニア・オーケストラは震災後飛躍的に増え、奥州・花巻・盛岡・宮古と総勢95名が活動している。今年度はその各団体の交流推進の事業が多く行われ、子どもたちはお互い刺激しあいながら多くのことを学んだ。

管弦楽フェスティバル2017やいわてジュニアオーケストラサミットでは、県内外との交流が盛んに行われた。３月のジュニアアンサンブルみやこの公演では、花巻・秋田から子どものソリストを招聘し演奏交流を行う。

ジュニアアンサンブルみやこの練習



合同演奏会

美術を通じたコミュニティ形成事業

沿岸での市民協同型美術ワークショップ・展示発表の支援

○美術ワークショップの実施

日程／会場

前期　　1月5日（金）・1月6日（土）　宮古市田老公民館

後期（予定）　3月27日（火）　kenzi コ lab（講師・小林健司氏の絵画教室）

講　師：森吉　健（画家／東京在住）

小林健司（現代美術家／宮古在住）

参加者：前期　1月5日　25名（保育園年長～小学5年）

1月6日　14名（保育園年少～小学5年）

後期は提言書発行後に開催予定のため、参加者数は未定。

沿岸部においてのアートの表現活動を支援するため、「ふるさと宮古の海でとれる魚を自由に表現してみよう」と題して宮古市で地元の子どもたちを対象とした美術ワークショップを開催した。子供たちに指導したのは、東京で活躍する画家・森吉氏と宮古で絵画教室を開く作家・小林氏。

参加した子どもたちは、地元の海でとれた魚を実際に触り質感を確かめながら、思い思いの絵の具を画用紙にのせて絵画作品を完成させた。講師に魚を上手に描くコツを教わり、みるみるうちに上達する子も多かった。

提言書発行後には後期日程として粘土で魚の造形作品を制作するワークショップを開催する予定である（３月27日実施予定）。

魚の絵を描く子どもたち

講師・森吉氏のデモンストレーション

○「おさかな絵画展」の開催

日　程：平成30年2月～3月

会　場：kenzi コ lab（講師・小林健司氏の絵画教室）

来場者：未確定

前期美術ワークショップ（１月５日・６日）に参加した子どもたちが完成させた30点以上の絵画を「おさかな絵画展」と題して小林健司氏（ワークショップ講師）の絵画教室に展示した。どの絵もいきいきとした筆致で、実際に本物の魚を観察して描いたからこその臨場感にあふれていた。絵画展には、地元に住むたくさんの方々にご来場いただき、子どもたちひとりひとりの個性が際立つ作品をじっくりと鑑賞していただいた。

絵画展の様子

市民参加によるコミュニティ形成事業

みやこ市民劇の立ち上げ支援

参 加 者：150名（出演者・スタッフ）
技術ワークショップ：[舞台] 平成29年8月5日（土）、[照明] 9月16日（土）実施
演技ワークショップ：平成29年10月～11月　6回実施
結 団 式：平成29年11月11日（土）
公　　演：平成30年2月11日（日）・12日（月・祝）
会　　場：宮古市民文化会館　大ホール
みやこ市民劇第一回公演「拓け、いのちの道を～鞭牛和尚の挑戦～」
脚　　本　道又　力
演　　出　坂田　裕一
殺陣指導　佐藤　貴之
衣装・メイク指導　大清水文子
ワークショップ講師（みやこデイジー対象）　小林七緒／山井真帆
入場者数：1659名

宮古市で初めて実施する市民参加劇の公演のため、稽古が始まる前の準備期間中に参加者（出演者・スタッフ）を対象にした舞台技術や演技のワークショップを開催。11月以降は公演に向け、演技・殺陣・衣裳・メイクの指導者を派遣した。ほとんどが演劇経験の無い参加者ばかりだったが、演劇作りの基本的な流れや各セクションの仕事内容など演劇作りにかかるノウハウを学び、指導者や会館職員のアドバイスを受けて自主的に作品創作に関わった。みやこ市民劇第一回公演「拓け、いのちの道を～鞭牛和尚の挑戦～」は多数の観客を集め、入場者及び市民劇参加者を対象に行ったアンケートでも、観客・参加者共に非常に満足度の高い公演となり継続を望む声が多く聞かれた。（アンケートの集計結果はP10を参照）

みやこ市民劇舞台

終演後の出演者と観客

「いわて震災詩歌2018」の発行

募　集：平成29年8月11日～12月8日

発　行：平成30年2月28日　　A5版500部

震災から６年を経て、被災体験や被災地を思いやる気持ちを短歌にのせて伝えてもらおうと、１篇５首という形式で「震災短歌」を募集した。県内外から集まった98篇490首から、優れた作品を選考して歌集500部を発行した。10代から90代までの幅広い世代から寄せられた作品は、色褪せぬあの日の記憶と、復興する未来への切実なる想いに満ち溢れていた。歌集は無料で、県内外の図書館や文芸団体などに贈られた。

歌集「いわて震災詩歌2018」

「3.11いわて文化復興支援フォーラム」開催

日　時：平成30年3月11日（日）午後1時30分～

会　場：もりおか町家物語館　浜藤ホール

参加者：76名

第一部　いわて震災詩歌2018　優秀作品授賞式

朗詠劇　～公募震災短歌から～

構成・演出：坂田　裕一　　ピアノ演奏：鈴木　牧子

出　　演：二階堂　芳子、鐙　浩史、山井　真帆、永井　志穂

「いわて震災詩歌2018」最優秀賞・優秀賞受賞者にご出席いただき、賞状・歌集を贈呈した。また、被災した方々や、そこに寄り添う方々からお寄せいただいた490首の短歌から85首を選び、ピアノの演奏に乗せて、出演者たちが朗読した。

授賞式の様子

朗詠劇～公募震災短歌から～

第二部　ディスカッション「文化芸術の市民参加とコミュニティ形成」

出演：佐東　範一（NPO法人ジャパン・コンテンポラリーダンス・ネットワーク代表・三陸国際芸術祭プロデューサー）

溝口　昭彦（岩手大学教育学部准教授・美術家）

こむろ　こうじ（岩手県演劇協会副会長・劇作家）

コーディネーター：坂田　裕一（特定非営利活動法人いわてアートサポートセンター理事長）

沿岸地域の文化芸術に造詣の深いゲスト３名が、「文化芸術の市民参加とコミュニティ形成」をテーマに、ダンスや郷土芸能、美術、演劇というそれぞれの専門分野から被災地の文化的なコミュニティの形成について意見を交わした。

（左から）佐東氏、溝口氏、こむろ氏

みやこ市民劇第一回公演来場者・参加者アンケート調査

①来場者

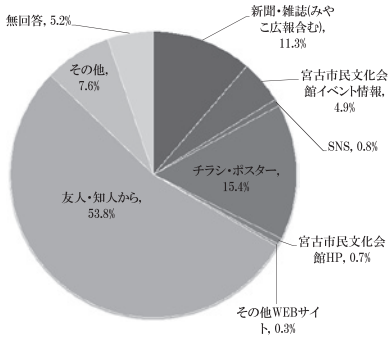
みやこ市民劇　第一回公演
ご来場者アンケート調査

拓け、いのちの道を

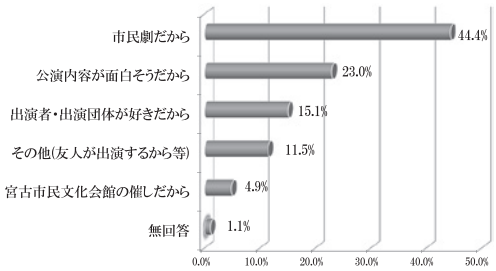
～鞭牛和尚の挑戦～

公　演　日：平成30年2月11日(日)・12日(月)
場　　所：　宮古市民文化会館大ホール
来場者数：2/11　751人　アンケート回収数249人
2/12　908人　アンケート回収数290人
合計　1,659人　アンケート回収合計539人

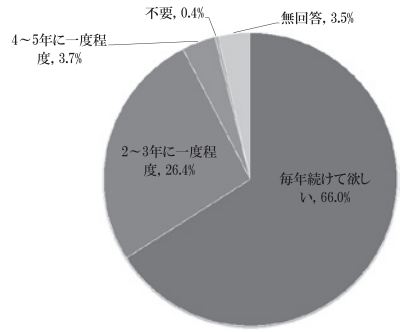
Q1.ご来場のきっかけを教えて下さい。



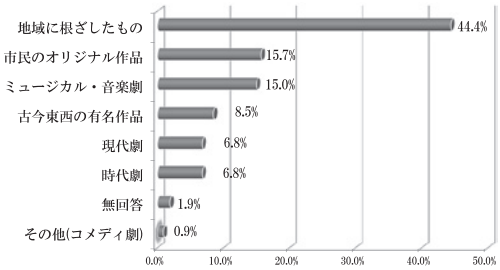
Q2.この公演に来られた主な理由をお聞かせ下さい。
（複数回答可　631件中）



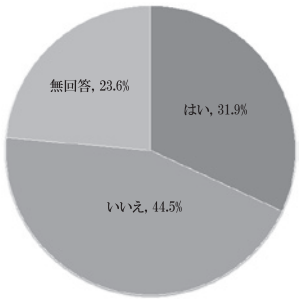
Q3.市民劇は続けてほしいですか?



Q4.市民劇を続ける場合、どんな演目を行って欲しいですか?
（複数回答可　791件中）



Q5.次回、市民劇が行われた場合、参加してみたいですか?



②参加者

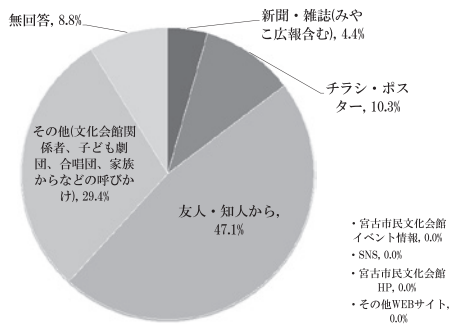
みやこ市民劇　第一回公演
参加者アンケート調査

拓け、いのちの道を

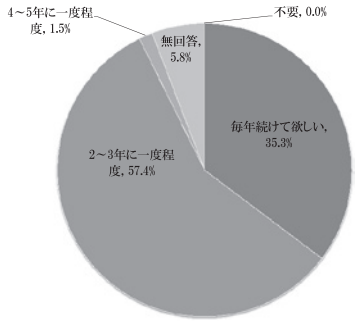
～鞭牛和尚の挑戦～

公　演　日：平成30年2月11日(日)・12日(月)
場　　所：　宮古市民文化会館大ホール
出演者およびスタッフ関係：160人
アンケート回収数：68人

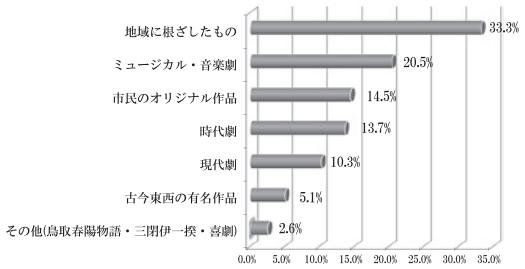
Q1.参加のきっかけを教えて下さい。



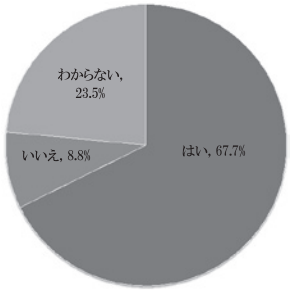
Q2.市民劇は続けてほしいですか?



Q3.市民劇を続ける場合、どんな演目を行って欲しいですか?
(複数回答可・117件中)



Q4.次回、市民劇が行われた場合、参加してみたいですか?



Ⅲ 文化復興支援フォーラム

3.11いわて文化復興支援フォーラム

平成30年3月11日（土）午後13時30分～　　もりおか町家物語館　浜藤ホール

～第１部～

いわて震災詩歌２０１８優秀作品授賞式
朗詠劇～公募震災短歌から～

東日本大震災から７年目を迎えた３月11日、浜藤ホールは満席となった。

13時30分の定刻通りに開演し、最初に「いわて震災詩歌2018　優秀作品授賞式」が行われた。「いわて震災詩歌2018」は、いわてアートサポートセンターが、被災した方々や、被災地に寄り添う方々から東日本大震災及び震災以降の情景や心の動き、復興や暮らしをテーマに、未来に向けての思いなどを詠った短歌を1篇５首という形で広く募集したもので、その結果、県内外から98篇490首の応募があった。

その中から厳正なる審査の上、最優秀賞１篇・優秀賞10篇・入選19篇・佳作14篇・一首選11首が決定した。入賞作品は歌集『いわて震災詩歌2018』に収められた。

授賞式では、入賞者が壇上に揃い、１人１人の紹介の後、いわてアートサポートセンター理事長の坂田裕一から賞状と記念品が贈られた。

授賞式の様子（左：三浦恵理佳さん、右：坂田裕一理事長）

＜選考委員＞

八重島　勲　　岩手県歌人クラブ会長
池田　克典　　前岩手県文化振興事業団理事長
吉田　史子　　岩手県歌人クラブ幹事
斎藤　　純　　作家

＜授賞式出席者＞

・最優秀賞　中村　とき（代理　三浦恵里佳）

・優 秀 賞　藤井　永子　　斎藤　陽子　　佐々木政子　　山本　　豊
　　加藤　信子　　赤平せつ子　　伊藤　綾子　　田浦　　将
　　（千田マス子・佐藤雅彦の２名は欠席）

◇選考委員代表の八重島勲氏の講評

「震災後７年目に入り、次第に記憶が薄れてきているのは悲しい。だからこそ今の心境を回顧して記録に留めておくことは、永く後世に残していくために有意義なことだと思う。最優秀賞作品の中村ときさんは今98歳だが、まだまだお元気です。『地震（なゐ）のあと』は津波に遭遇した事実を回顧して、今なお行方不明の姉と甥の哀れを詠った。昭和の大津波、チリ地震津波、そして今回と３回も津波を体験された心境を表している。これからも望みを持っていこうという歌も含まれており、選考委員全員一致で選んだ。優秀作品も入選作品もそれぞれ内容が重い切実な短歌作品だったと思う」（一部抜粋）

朗詠劇　～公募震災短歌から～

「いわて震災詩歌2018」に寄せられた作品を、短歌朗詠劇として上演した。

■構成・演出　坂田　裕一

■出　　演　二階堂芳子　鐙　　浩史　山井　真帆　永井　志穂

■ピアノ演奏　鈴木　牧子

鈴木牧子さんの哀調を帯びたピアノ演奏で開演。

舞台には４人の演者（読み手）。バックに短歌作品の題が映し出され、演者が高く低く朗々と読み上げる。歌のシーンに合わせて位置を変えながら、演者たちは感情を込めて詠んでいく。舞台に変化と動きが生まれ、情景をまざまざと浮かびあがらせる演者の素晴らしい朗詠に聴衆は引き込まれた。

歌と歌を音楽がつなぐ。凪いだ海、荒れ狂う海、時にやさしく時に激しくピアノ演奏が臨場感を盛り上げる。およそ30分にわたって繰り広げられた朗詠劇、それぞれの人が持つ悲しみ、怒り、悔い、祈りが短歌となり、声を出して詠む朗詠劇の形式を得て人々の心に届いた。会場には被災者の姿も見られ、涙する方も多かった。

（左から）鈴木さん、山井さん

（左から）鐙さん、永井さん、二階堂さん

～第２部～

ディスカッション「文化芸術の市民参加とコミュニティ形成」

◆ゲスト

○佐東　範一

ＮＰＯ法人ジャパン・コンテンポラリーダンス・ネットワーク（JCDN）代表。三陸国際芸術祭プロデューサー。80年―94年舞踏グループ「白虎社」舞踏手兼制作者として活動。96年米・NYにて１年間のアートマネージメント研修。01年NPO法人ジャパン・コンテンポラリーダンス・ネットワーク（JCDN）を京都にて設立。以降、日本全国にて社会とダンスをつなぐ様々な活動を行っている。11年震災以降、被災地にて「習いに行くぜ！東北へ!!」、14年より「三陸国際芸術祭」を開催。

○溝口　昭彦

1960年福岡県生まれ。1983年より岩手県内の公立中学校・高等学校教員として盛岡・釜石・花巻・宮古で勤務。現在は、盛岡と宮古を拠点に制作を続ける。岩手大学教育学部准教授。専門は絵画表現を起点とした複合媒体表現の研究。

○こむろ　こうじ

1965年生まれ。岩手県演劇協会副会長。日本劇作家協会、日本演出者協会所属。岩手県内の市民劇場、劇団の立ち上げ支援を行う。主な作品『ＫＥＮＪＩ』（盛岡劇場創作舞台）『平行螺旋』（劇団もしょこむ）

◆コーディネーター

○坂田　裕一

特定非営利活動法人いわてアートサポートセンター理事長、岩手県演劇協会会長。日本演出者協会員。

ディスカッションの様子

東日本大震災と芸術・文化の支援

坂田：最初にパネラーの皆さんからお話をいただきます。佐東さんは東日本大震災の時に沿岸被災地にダンスで文化支援をしようと入り、その後、三陸国際芸術祭というイベントを作りました。

佐東：私は、普段は現代ダンスの制作プロデュースを行っています。一番初めに入ったのが野田村でした。そこでボランティアの人たちと一緒に足湯の横で体を動かす体操を２年ほど続けましたが、自分たちが行くといつのまにかアーティストが中心になっているような気がして、郷土芸能を習うことができないかと思ったんです。2013年に郷土芸能を「習いに行くぜ！東北!!」というプロジェクトをやり、郷土芸能の人たちと知り合いました。その時に思ったのが、僕たちはダンスを通じて1つのコミュニティを作ろうとしたけれども、既に三陸の中では郷土芸能がコミュニティを作る要になっている。集落ごとに郷土芸能があるんですね。郷土芸能がその地域を繋ぐための大きな装置に見えてきた。「コミュニティアース」はJCDNで全国的に行っているプロジェクトで、一般の人たちと作品づくりを全国で行っているが、既に郷土芸能には子供から高齢の人まで関わっているというか、郷土芸能自体が日本の中のコミュニティアースだと思ったところから始まりました。

それならば外からきた人間として何ができるか。そのコミュニティの中に逆に入れてもらうことはできないかと思った。例えば、大槌では町が流されたとしても人が祭りになると集まってくる。地域のコミュニティが郷土芸能をもとに存続されていることがすごい。日本の文化をそのまま残してる地域であることに僕たち自身が衝撃を受け、そこにいろんなアーティストを連れて行った。例えば海外で活躍しているアーティストが、もし地域にこういう芸能があったら私は海外に行かないで地域の芸能をずっとやり続けたのに、という人が多かった。

インドネシアのバリ島にすごく似てると思ったんです。バリ島は各地域に芸能があって、世界から芸能を習いに来る。芸能自体が1つの観光になっていて、観光でもあり宗教の象徴でもあり生活の営みでもありという地域で、そこに三陸がかぶってきた。初めは支援をしに行くと、被災をされた方は「ありがとうございます」と言って話をするけれども、どうしても支援者と支援される人の関係になってしまっている。それが芸能を習いに来たと言うと、「あそこの芸能は、私も出ていて」などと芸能自体が一つの共通語に見えた。ようやく人と人とが対等になり、被災じゃないことで話ができて、芸能の話になるとどこまででも話がつながっていくのがとても面白かったです。

バリ島の人たちも来ましたが、三陸の芸能を見てすごくびっくりして、こんなにすごいものが日本にあるのかと。アジアの芸能と三陸の芸能、たぶん日本中の芸能が底辺でつながっていて、国は違うけれども国境を越えたところに芸能があって、芸能が1つの新しい人と人とのつながりを生み出すことができると感じました。芸能の強さを日本全国と世界に発信できて、世界中から三陸に人が訪れる仕組みを作りたいというのが、今自分たちがやっていることです。

坂田：溝口さんは美術家で、沿岸の学校で先生をなさっていました。演劇や音楽、ダンスでコミュニティを作るのは比較的わかりやすいが、美術でコミュニティを作るのはどうすればいいのかと時々思うことがあります。

溝口：私は、出身は福岡ですが、岩手県で中学校と高校の教員をしていました。宮古に仕事場と倉庫をもって通いながら製作をしています。今日は、今大学でやっていることと震災以後いろんな美術のイベントが行われた状況を見ながらお話しします。2011年から世界的にも有名な作家が多く岩手県を訪れています。陸前高田はアートインレジデンスで、多くの海外の作家が滞在しながら作品を製作した。同じく陸前高田には東京芸術大学大学院の小森はるかさんと瀬尾夏美さんが入って生活しながら作品を作り、小森さんの作品が映画になって盛岡でも上映されている。三陸国際芸術祭が大船渡中心で、遠藤一郎さんという現代美術家も自分でイベントを立ち上げている。釜石は日比野克彦さんの東北のこよみのよぶねという大きな現代美術というか、海に実際に船を浮かべて、光をともすプロジェクトをやっている。それから世界的に有名な川俣正さんもベンチや椅子をつくるワークショップを実施しています。

桜の木を植える学校プロジェクトは、美術とか野外に置くモニュメントを作っている方々が共同で作った団体で、日本のアーティストや地元の百瀬さんとか、学校等に派遣して桜を植えてワークショップをやるイベントです。東日本元気プロジェクトはすどう美術館が大槌町を中心に展覧会やワークショップを開催している。あとは台湾壁画隊が大槌町のビルの壁面に大きな壁画を作ったりしてる。いわてアートサポートセンターもいろんなイベントをやってる。岩手県立美術館は文化財自体をレスキューするプロジェクトも組んでるし、アートキャラバンは外に出て活動していく子供向けのワークショップや、ルーブル美術館の館長なども学校や公民館等で公演やワークショップをやった。こうした美術イベントをどのようにつなげていくかが、私たち地元にいる人間のポイントだと思っていました。

最初の段階でアーティストが被災地に入ろうとすると学校現場等では、なかなか動きがとれなくて受け入れてもらえない。お互い大変な状況でうまくいかなかったのが2011年、12年、13年だったのではないか。それで、岩手大学には岩手大学アートフォーラムという美術芸術系の教員が作っている団体があり、私たちは自分たちがやりたいことを被災地に持っていくよりは、いろんな話を聞いて必要なこと、やってほしいことを少しずつ地味でも積み上げていく方法論をとったほうがよいという結論で、この公開講座のイベントは沿岸の先生をお呼びして、どんなことをやったらいいかというヒアリングをしました。あるヒアリングの中で被災者の皆さんのために何かできないかと支援にやって

佐東氏（左）、溝口氏（右）

くる人々には感謝しつつも実は大変迷惑に思うことがあるのが本音だという言葉が強く印象に残っています。

いわて美術茶話を２年間で８回やりました、美術のつながりを持つように会話をしながら、美術の支援者というか、コミュニティ、仲間を作ろうとするイベントをやっています。それから大学のゼミナールで、私も今年企画したんですが、教育学部と人文社会学部の１年生40名ぐらいが宮古に行って、近江絵里さんがどうやって震災からデザインとか美術へ自分の生きる道を探し出して、今どんなことを考えているのかを大学生と一緒に考える授業を実施しています。

今、考えていることは、岩手に住む私たちは企業や行政や大きな美術イベントを資源としながら、それを縦軸として、それを織り込むように地元の私たちが縫うようにして地道に広げていって仲間づくりができればいい。そしてこの町にちょっと住み続けたい、というふうなことに結び付く。美術的な価値以外にも希望を持てることがあればいいと思いました。最後に、これは私の実体験ですが、2011年の４月に山田に親戚がいたので片づけに行ったときに、親戚が瓦礫の中に若葉を見つけてホッとしたんだと言った。その時、美術で何もすることないなと感じていたが、そうか、こういう感性とか感覚というのはすごい大事なことだと思ったし、陸前高田の美術の先生は、子どもたちにはできるだけ美しいものを見せたいと言われた。それも僕の気持ちに残っていて、小さなイベントを重ねながらやれればいいなと思っています。

坂田：続いて、こむろこうじさんは演劇人、学校の先生でもあり、今久慈にお住まいで、沿岸の全部の演劇シーンに関わってきた方です。

こむろ：22年前、陸前高田で劇団を旗揚げしました。その時に掲げたのが「地方からの文化発信」、東京がメインじゃなくて地方からもいいもの作れば評価してくれるのではないか、外にどんどん発信していこうとスタートしました。チャンスと人脈さえつなげればもっともっといろんなことができるかなと、どんどん、赴任地が変わるたびにいろいろやっていました。

舞台前に広げた横断幕は、釜石の釜石市民劇場のものです。当時、釜石市民劇場の入場者数1400人でした。それが、ホールが被災してもうできないんですが、ホールができるのを待っていたのでは60過ぎた方々はもう死ぬまで芝居できない、それは嫌だと、テントで演劇を始めてもう３～４年ですが、全盛期1400入ってたのに去年の入場者数は100です。今、TETTOという新しいホールができて、釜石市民劇場再生というところですが、果たしてお客さん入るか。結局、高齢になってしまって、メンバーの引継ぎも７年間のうちに人材育成もできなかったという厳しい状況です。

私は基本的に助けてほしいというところがあれば行って手伝うっていうスタンスをとっており、声が掛かればお手伝いしようと思っています。今中心的にやってるのは11年目になりましたが、久慈の市民劇場、おらほーるという山形村にあるホールです。地域人口3000人です。合併して久慈に大きなアンバーホールがあるので、おらほーるの再生、そこに人が集まるものを作ってほしいという依頼を受けて、そこで芝居を始めてい

ます。

伝統芸能の神楽や剣舞もワンシーンに入れ、そこの人たちともコラボレーションするし、例えばポスターなども地域の人に公募して門戸を広げています。さらに、挿入歌も作って、CDも一枚500円で販売し、なんと100枚くらい売れた。自費でバンドやってる人たちが100枚売るのは大変なんですが、歌でもいけるんじゃないかという子が出て行って勝負をかけるというきっかけを地域でつくることも、コミュニティ形成のなかで重要じゃないかと取り組んでいます。

溝口氏（左）、こむろ氏（右）

震災後にNHKでテレビドラマのオーディションがあり、久慈の市民劇の舞台に出た子が選ばれました。岩手の一中学生が、NHKの主演ができる。レッスンをして東京に行くことで実現するのではなくて、地元にいて夢を実現することができる。そういうことも市民劇場含めてコミュニティ形成、可能性があるのではないかと思っています。

現在の課題、そしてこれから

坂田：皆さんには質問に答えていただければと思います。まず佐東さん、三陸国際芸術祭、今どんな課題があって、どうしたいのか、ということについてはどうでしょうか。

佐東：いくつか課題はありますが、地元の郷土芸能を世界に発信したいと思っても、郷土芸能は地域の信仰のものであったりして、世界や全国に発信することが意識としてない。外から来た人間がこれはすごいと言ってもなかなか伝わるものではないことが分かりました。一番初めに大船渡市と一緒にこれができないかと思ったが、大船渡市の方はかさ上げの最中で、仮設住宅もあるし、文化まで手が回らないという話で、外からきたNPOと地元で復興支援をやっている事務所と５、６人くらいで始めた芸術祭なんです。都会でやるとボランティアスタッフとか手伝ってくれる人がいるんですが、被災地で芸術祭をやろうとしたときに、市がいっぱいいっぱいだと手伝ってくれる人たちがほとんどいなくて、広がりを作るのが一番難しいと思いました。文化庁から助成金をもらっているので芸術祭の期間のお金は出るがそれ以外のお金は対象にならないのでどうつないでいくということも大変でした。対象にならない期間もバイトではなくちゃんとスタッフを抱える体制を作れるのかが、今大きな課題です。それで今年から実行委員会を作ろうと準備しているんですが。

坂田：それは大船渡だけでずっとやっていくんですか。

佐東：たまたま一緒に始めた事務所が大船渡だったので、大船渡、陸前高田、初めのうちは住田町とか、できたら八戸まで三陸全域でやりたいと思って今準備をしているところです。

坂田：びっくりしたのが、金津流が９団体集まって踊りを一緒に踊っている。同じ流派でも日頃やってないのをどうやってコーディネートしたのかな。

佐東：金津流の９団体が一緒にやるのは芸術祭があったからなんですが、それは初め紹介してもらった金津流の人に９団体一緒にできませんかねみたいな話をしたら、やってみようかみたいな話で。

坂田：中の人が言うよりも外の人が来たからできたってことなんですかね。

佐東：それはすごく大きい。郷土芸能専門の立場だったら多分そんなこと言い出せないし、逆に相手にもされなかったと思うんです。でも僕完全な門外漢なので、逆にそのことに対して面白がっていただいたというか。初めその９団体の代表の人たちに説明に行ったんですよ。こんなことやりたいと話したら、皆さん反応がないんです。反応がなくて口々にうにゃうにゃと、わからないうちに最終的にその代表の人から「やります、やることになりました」と。郷土芸能のことを知らなかったからこそ今一緒にやれてるというか、お付き合いさせていただいている感じがします。

坂田：溝口さんにお聞きしますが、先ほど大きな縦軸のイベントがあって、横軸としてみんなの個別の地道な活動があると。大きな縦軸のイベントって一体何を考えているのか、お話しできることがあればお聞きしたいんですが。

溝口：私たちが作っているというより、外から入ってきた人が残してきたものを財産にしてしまおうという感じです。人の出会いとか各地でいろんな刺激を受けていると思う。あの時期、内陸にまでいろんなアーティストが入って行って、普通に会えないような人との出会いもあるわけで、それをプラスにとらえて、風化させないで維持したり発展したり地元に根付かせたりとか、そういうことがあるのではないかというお話です。

坂田：もう一つ、実際にアーティストが地域に長期滞在して作品を紡ぎながら地域の人と共存していくのは、演劇や音楽では非常に難しいし、美術も大変じゃないですか。

溝口：現代美術の作家は基本的に社会と関わろうとしているし、その土地を生かそうとするので、積極的にその土地のものを吸収することが多いんです。作品を持ってきてどうだと価値観を提示するよりも、中に入ってやっているアーティストは、様々な総合性のある活動をしている方が多いと思います。

坂田：三陸国際芸術祭でも同じように……

佐東：そうですね。「習いに行くぜ東北」というのである程度滞在して郷土芸能を習おうとしているのと、美術の方でもできたら滞在しながら作品を作っていく受け入れ態勢を作れたらと思います。ほとんどのアーティストは外から何かを持ってくるよりは、その地に滞在しながら自分の作品を作っていくことで、新しいコミュニティを生み出しているように思います。陸前高田の小森さんたちも東京芸大に震災後住んで、仕事もやって、陸前高田のアーティストインレジデンスの中のイギリス人ダンサーが住田町の鹿踊りに出会って、初めレジデンスだったけれども、完全に住み着いて鹿踊りのメンバーになった。だからアーティストが入る１つの入り口として、レジデンスという方法は今後やっていきたい分野ですね。

坂田：民俗芸能が震災直後、祈りとかコミュニティ復活のために大変大きな役割を果たしてきましたが、最近、後継者不足という中でその地域にしか伝わらない芸能に外の人も入っ

ていいよと変わりつつあると思うんですが。

佐東：少子化でどんどんどんどん担い手が少なくなっている。まだ子供がいる地域はやっているけれども、多くは外から通う人や、今までは男の人だけのものだったのが最近女の人たちも入って、女の人たちだけの鹿踊りができたり、すごく大きな変化ですよね。僕たちの仲間ももっと習いたいと大船渡に移住したりして、地元の人たちも外から人を受け入れていかないとという大きな危機感がありますね。

坂田：こむろさん、市民参加劇は民俗芸能とは違って、どこからきてもいいよという柔らかいところがあり、私は釜石の市民劇場が復活するとき不用意にホールができてからにしたほうがいいんじゃないと言ったら、「待つ苦しさよりもやるための苦労の方がどんなに楽か」と言われました。市民参加劇がそこまでやっている人のコミュニティに力を与えている大きな理由は何ですか。

こむろ：世代を超えて一つの物を作るという経験が意外と今の時代になくて、その入り口として市民劇の効果があるんじゃないかなと。伝統芸能、音楽、演劇などいろんな経験をしていたり、違う考えを持ってる人たちが一つのことを作ることで、あ、こういう考えもあるんだと相手を受け入れるコミュニティ形成の入り口になって、広くなっているのではないかととらえています。

それぞれの質問にお答えします

坂田：では、会場の皆さんから質問をいただきたいと思います。その前に、他のゲストの方に質問があればどうぞ。

こむろ：震災後、体験型がすごく効果があると思うんですが、体験型の活動でこんなことも考えられるということがありますか、溝口さんお願いします。

溝口：美術の出会いは幼稚園の時のお絵かきから、小学校、中学校、高校と美術教育のなかでの関わりが強いと思うが、その流れ以外で要するに評価の関わらない部分でものを作ったり体験したりするのは大切なことだと思います。美術館がやっていた様々なプロジェクトは、全体としてとっても大変な状況の中で色や形が積み上げられていて、クリエイティブ、創造的なところなど、見えないけれども成就感とかに結び付いていって、苦しい中でも完成したとか楽しかったという体験が将来、美術に関係のある仕事に就きたいということに結び付くのは大いにある。だから、評価に結び付かなくてほんとに純粋に物や形と関わっていくのは有効なことだと思うし、それは美術館だけではなくて、大学等でも可能だと思うので、いろんな所でもし要請があれば実践していきたいですね。

こむろ：学校現場の教員としてもっと開かれた学校、それから多忙化解消ということで先生たちが教えるだけじゃなくて、いろんな能力を持った外部の方々から教えてもらう形で子どもたちを育成しようというのが今の流れなので、ぜひお願いしたいと思います。

佐東：こむろさん、岩手県がそんなに市民演劇が盛んな理由は、何かあるんですか。郷土芸能が多いのもそうなんだけど、そういう血が流れてるということなんですか。

こむろ：私はやっぱり郷土芸能の流れだととらえています。娯楽の地産地消という感じで、自

分たちの仲間が演じて、それを見に行く。根っこは郷土芸能ではないかととらえています。

坂田：遠野物語ファンタジーという遠野市の市民舞台が実は全国の第一番目でした。遠野の市民文化センターができたときに、遠野には遠野物語という大きな素材があるからそれを生かしてなにか舞台作れないかと。市民文化センターを使っているブラスバンドやダンスの人も交えて舞台を作っていこうと40数年前に始まった。それが大きな成果、評判になって派生したところもある。もちろん郷土芸能の流れもあるし、各地域が各々のコミュニティの存在意義を求めてやり始めたこともあると思います。

佐東：例えば郷土芸能はもともと誰かが作ったものですよね。それが何百年も続いてきたが、新たに作った郷土芸能もある。市民劇と郷土芸能は時代が違うだけで何か物を作ったり演じたり音を鳴らしたり作ることが、生活の中でちゃんと食べる・寝ることと同列にあり、岩手県に脈々と流れている血なのかなと思います。三陸に入って一番びっくりしたのが、伝承館で寝泊まりしたときに週２日、３歳から小学６年生までの子どもの民謡の稽古をしていました。演奏は大人が付いて、お師匠さんがいて３歳の子とかが朗々と民謡を歌い始める。「違う！」、「もう１回！」と言われても泣きもせず、また歌い始める。テレビ文化とか東京の文化に全く侵されず独自の文化をちゃんと守り、伝え続けている。今もなお生活の中にあることにカルチャーショックを受けました。

溝口：佐東さんにお伺いします。踊りを習いに行くのは面白いプロジェクトだと思うんですが、最初にコンテンポラリーダンスをやってる人が習いに行くと、ダンサーとの調整などはどんなふうにとっていったんでしょうか。

佐東：現代ダンス、コンテンポラリーダンスをしてる人たちは、郷土芸能に出会ったことがなかったし、とても遠い世界だった。興味はあったけれども習うことはできないと思っていたところに、習う機会を持ったらばほんとにみんながはまった。というのは、現代のダンスをしてる人たちは欧米の体の動かし方をずっと何十年もやってきてその道のプロの人たちですが、日本の例えば剣舞、鹿踊、神楽にしても体の動かし方が全く違う。どこからこういう動きが生まれてきたのかという面白さにはまって、去年コンテンポラリーダンスで東京で活躍している人が大船渡に習うためだけに移住しました。そもそも「習いに行くぜ」が始まったのが、ちょうど震災の１か月後に僕とか平田オリザさんたちが車で来たんです。盛岡にも来た時に坂田さんたちと合流をして、セミナーや情報交換後に打ち上げになり、その時に文化芸術が復興で何ができるのかを全国のアーティストや文化関係者で話していたんですが、またそこの場でも１か月後だからすごいホットな時でした。僕は坂田さんと実は論争になったというか、ダンスでこんなことできるみたいなこと言

（左から）佐東氏、溝口氏、こむろ氏

うと、坂田さんは「そんなものいらん」「そんなものは意味ない」と、段々喧嘩になってきて周りがこう危ないみたいな感じで（笑）。そして一番最後に僕が出したのが、こっちは郷土芸能が盛んだが、例えば郷土芸能を習いに来るのは「どうなんだ！」と言ったら、坂田さんが「それならありかもしれない」と。ただ僕自身なかなかそこに行きつかなくて、２年かかって2013年にとにかく実現させようと言ったのが始まりでした。

坂田：佐東さん、そのせつは、大変失礼いたしました。それでは、最後に観客の皆さんからのご質問に答える形でお話をいただきます。まず、「こうした文化的ムーブメントに全く無知であったので皆さんのお話を聞いて驚いています。一過性のイベントも大切と思いますが、ぜひ将来にわたって地域に根付いた運動になっていくことを願います」というご意見がありました。

非常に本質的な質問もあります。「ある神楽の方から、その地域ごとに振付が異なることはもとよりその地区が山仕事であるか田畑を耕す職であるかなど、その生業暮らしを反映してきたものと聞いたことがあります。伝統芸能には独自性と排他性が共存していると私個人は感じてきたのですが、それがオープンになり内外の交流が起こった時、その独自性の変容をどうとらえればよいでしょうか。これは逆に郷土芸能とは何かという定義やその存続意義ということになるのかなと思いますが、それについてお伺いしたい」ということです。佐東さん、いかがでしょうか。

佐東：僕はまだ郷土芸能の新参者なんですが、ここ５年くらい郷土芸能の人たちとお仕事していて、初め郷土芸能は固まったものがあると思っていました。例えば神楽にしてもいろんな神楽によって踊り方も流れも違うし、いろんな人にこの大本を誰が考えたのかと聞くと、誰も知ってる人はいない。ある程度その時代時代によって変わってくる。今までは保存ということが僕たちのイメージの中にあったけれども、今は保存というよりは今生きるものとして、例えば現代ダンスというコンテンポラリーダンスを僕たちがやってるのと、郷土芸能はものがちがうだけで一緒なんだと思ったことが大きいですね。

坂田：「諸外国と日本の郷土芸能の類似性はなにかありましたか」については。

佐東：去年、一昨年にいろんな国の獅子舞と呼ばれるものに来てもらったら、アジアに関しては大本は一緒で、国によって発展の仕方や作り方が違う。例えば、日本の中でも沖縄の獅子舞と東北の獅子舞は違うが一堂に会してみると、親戚が集まったような感じがする。

坂田：３人の方々に共通でいくつかの質問があります。「短歌朗詠劇の感想は」、「東日本大震災がアートや演劇に与えた影響インスピレーションは、あるいは人生のとらえ方生き方に与えた影響インスピレーションは」、「文化芸術の市民参加とコミュニティ形成の大きな壁はなんだと思いますか、予算？人材？小屋？小屋ってホールのことですね。高齢化？市町村長のやる気？知事のやる気？」、最後、「文化による復興支援の一環として昨年今年とこのフォーラムが開かれています。フォーラムの意義をどう感じていますか？」という全部で５つの質問です。それぞれお答えいただきたいと思います。

こむろ：短歌の感想です。次の舞台でやってみたいです。ぜひいいのを書いて提供いただければやりたい。演劇に与えた大震災の影響ですが、子供たちにいいものを見せる機会が期

せずして与えられました。それで伸びている子供たちをさらにどんどん出したい、伸ばしていきたい。市民参加の壁、うちで閉ざされないことです。家元とかになってうちには誰も入んないで、うちにはうちのやり方という閉ざされないことがもっともっと広がると思っています。フォーラムの意義は、震災を忘れないという意味でこれは続けていっていただければと感じています。

溝口：朗詠劇の感想ですが、僕は「仮住ひ」、震災を忘れるために中断してた書道をもう一回やり続けるということが生活と芸術の意味ですごくリアリティがある。ご本人じゃないと多分わからないんですが、忘れるがためになにか書き続けるとか、書き続けたことによって忘れられるとか、なにか集中してることが少しだけ幸せにつながっている。そういうところが個人的な美術の本質的な意味に関わることじゃないかと思って、この歌と、劇を観てちょっと心が痛くなっていくと感じていました。あと、人生と芸術ですね、震災等はやっぱり芸術家にとっても表現することに大きな影響を与えていると思います。壁の話ですが、コミュニティを作る時の壁は、やっぱり伝えることと受け取ることの難しさというか、今はインターネットやSNSが発達して、そういうことだけで情報共有がされていくんですが、初期の表面的な情報共有の次の、ほんとに行きたいとかやりたいな、一緒に考えたいというところはどうしたらいいかが壁だと考えています。

佐東：短歌劇の感想ですが、初めて拝見したというか、言葉の力ってすごいなってとても感動しました。よかったです。その情景が全部浮かんできたのでとても感動しました。震災によって文化芸術がどうできるのかという質問が混ざってしまうんですが、地元に住んでいる人たちと、外の人間の役割は何なんだろうと思いながら初期の頃やっていて、今思うのは僕たちみたいな外とのつなぎ手がひとつ自分たちの役割なのかなと思います。これから芸術祭だけではなく年間を通して、外野の人だったり外野のアーティストが郷土芸能を習ったり、郷土芸能を見られるような仕組みを、三陸だけではなくて他の人たちを巻き込みながら作っていけるかなと思っています。もう一つ、文化芸術で何ができるかという初めの話に戻ると、ようやくかさ上げが終わって新しいコミュニティができようとしてて、今まで仮設で一つのコミュニティができたのが壊されてバラバラになっていく。ある意味文化芸術の力は、人と人をつなげる力ではないかと思って、だからほんとに必要とされるのは今からだろうという気がしています。

坂田：ありがとうございます。文化芸術が持続可能な地域社会を築いていくために大きな役割を果たしていくことを念頭にこのフォーラムをやってきています。震災直後に私は「私たちは文化芸術の役割を本当にきちんとつかまえていたんだろうか」と深く反省させられました。こうしてフォーラムで議論を重ねますと、人と人をつなぐのが文化芸術なんだろ

（進行）坂田裕一

うと思います。現代アートと民俗芸能が一緒になったり、様々なジャンルと演劇が一緒になり、コラボレーションしたり出会うことによって新しい文化が生まれたり、地域社会に新しい文化芸術の役割を果たしていくのではないかと思います。１年１年課題が変わってきますが、その課題に向き合うようにフォーラムを続けてまいりたいと思います。

本日はどうもありがとうございました。

Ⅳ 市民参加の舞台づくりにかかる
アンケート調査集計結果報告

都道府県からの回答

市民参加の舞台づくりにかかるアンケート調査

都道府県からの回答

1

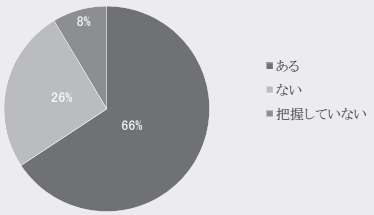
調査の概要

【調査方法・対象】アンケート方式
全国47都道府県の芸術文化振興担当課。

【回答者】
47都道府県のうち、
35都道府県から回答があった。

2

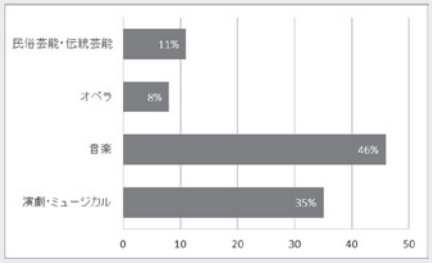
質問1
貴都道府県内に一般市民公募を中心とした市民参加の舞台公演はございますか？



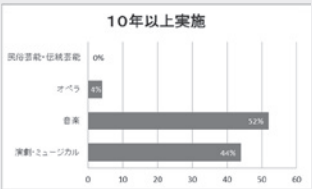
3

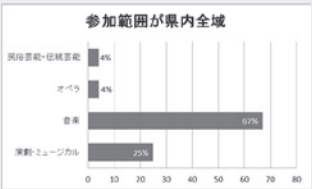
質問2
＜質問1で「ある」と答えた都道府県のみ＞

把握されている市民参加舞台の実施数について



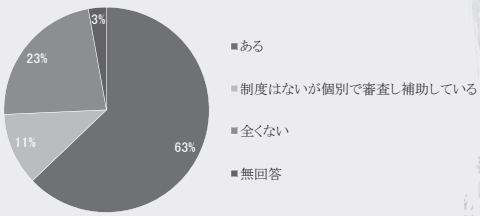
4





5

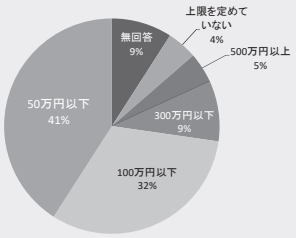
質問3
市民参加の舞台に対する助成制度はありますか？



6

質問4
＜質問3で「ある」と答えた都道府県のみ＞
助成金の交付要件について

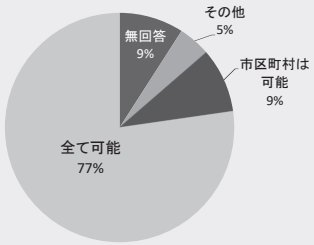
(1) 上限はどの程度ですか？



7

質問4
＜質問3で「ある」と答えた都道府県のみ＞
助成金の交付要件について

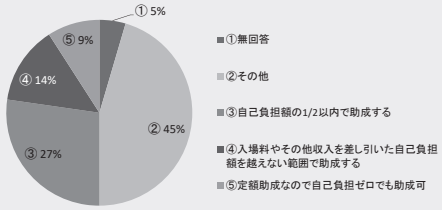
(2) 国や市区町村からの助成金や負担金との併給は可能ですか？



8

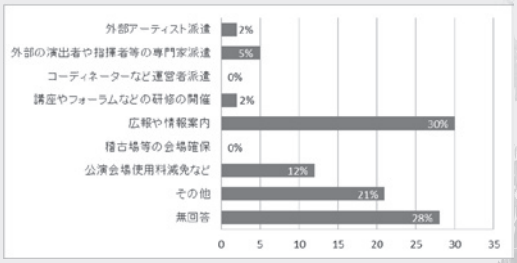
質問4
＜質問3で「ある」と答えた都道府県のみ＞
助成金の交付要件について

(3) 助成金額と自己負担金（主催者負担額）の割合について



9

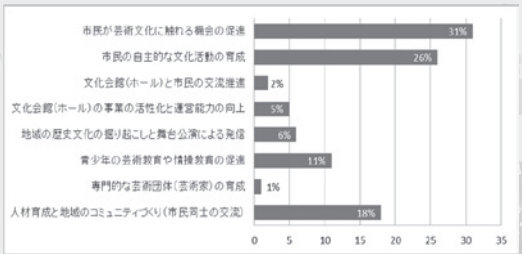
質問5
市民参加の舞台の振興で、
都道府県が助成金以外に支援していることについて



※該当するものすべてを選択していただきました。

10

質問6
市民参加の舞台づくりが担っている役割・意義はなにか



※記入者の個人的なご意見を上位3つまで選択していただきました。

11

各都道府県の市民参加舞台実施数

	都道府県	演劇・ミュージカル	音楽	オペラ	民俗芸能・伝統芸能	計
1	長崎	3	18	4	3	28
2	山梨	2	12	2	4	20
2	岩手	18	2	0	0	20
4	千葉	6	11	0	1	18
5	兵庫	8	4	1	0	13

都道府県からの回答といわてアートサポートセンターの独自調査の結果を組み合わせた集計表です

実施団体からの回答

市民参加の舞台づくりにかかる アンケート調査

文化会館や自治体からの回答

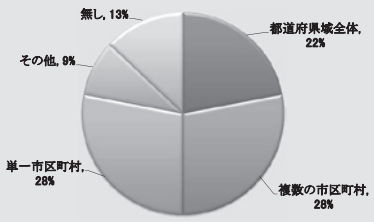
調査の概要

【調査方法・対象】アンケート方式
全国の市民参加の舞台づくり実行委員会

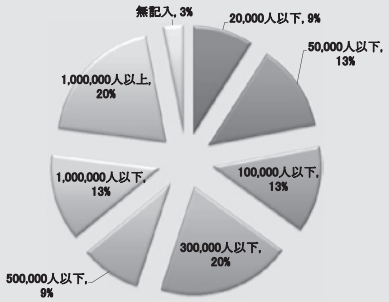
【回答者】
87団体のうち、
46団体からの回答があった。

【公演概要や予算財源などの基本情報について】

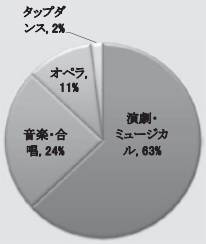
3. 参加対象(公募)範囲



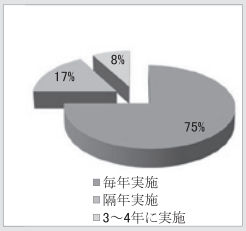
4. 参加対象エリアの人口規模



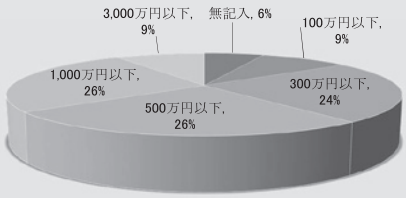
5. 公演ジャンル



6. 公演実施の頻度



7. 予算規模(総経費)

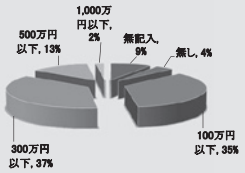


8. 公的助成・自治体負担金

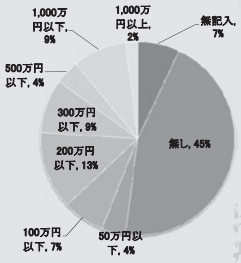
(1)公的助成金や地方公共団体の負担金等について、公演財源の一部として利用しているものは
(複数回答可)

利用している補助金等	46団体中
1. 国の芸術文化振興基金	19%
2. その他の国の補助金等	5%
3. 都道府県の芸術文化振興基金等	12%
4. 都道府県の補助金等	8%
5. 市区町村の負担金・補助金	49%
6. その他/地域創造・自治総合センター	5%
/宝くじ助成金	2%

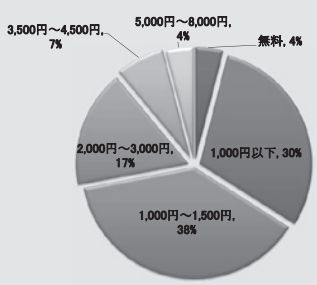
(2)最も近い実施年度の助成金の総額はどの程度ですか?



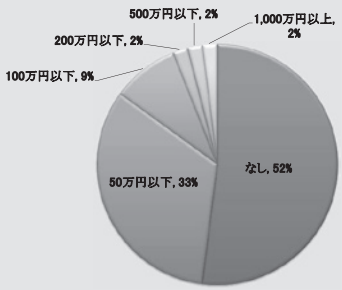
(3)文化会館(ホール)が主催・共催する場合、指定管理料または運営費の中から拠出している額はどの程度ですか?



9. 一般前売りの入場料はいくらですか?



10. 企業や商店など民間からの協賛金・広告収入はどれくらいですか?

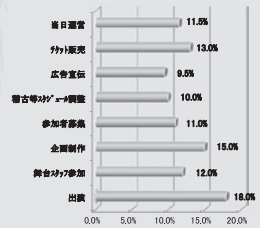


【運営内容についての質問】

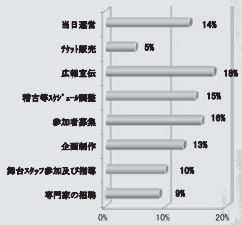
質問1. 運営の主体は?

項　目	46団体中
1.自治体が企画・主催	7%
2.ホール(指定管理者を含む)が企画・主催	28%
3.ホールと市民団体の共同主催	13%
4.ホールと市民で実行委員会等を設置	24%
5.市民団体が企画・主催しホールや自治体が資金・会場提供など	21%
6.市民団体が企画・主催	7%

質問2. 参加する市民の主体的な役割・業務は?(複数回答可)



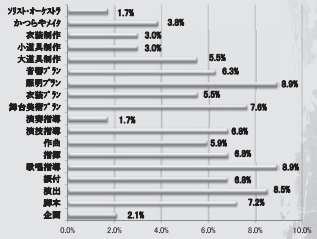
質問3. 自治体またはホール職員の役割・業務は?(複数回答可)



質問4．外部専門家の招聘や協力について

(1)外部の専門家に業務の委託や指導を依頼していますか?

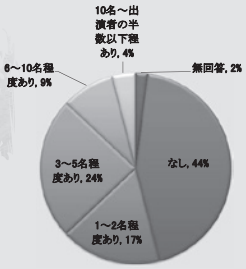
(2)左記で依頼していると答えている方のみご回答下さい。外部専門家へ依頼する内容は何ですか?(複数回答可)



質問5．外部の専門家への依頼についてお尋ねします

項目	46団体中
1. 公演や企画の都度、必要な人に依頼する	57%
2. 複数年にわたり中長期的に依頼する	4%
3. 依頼内容によって上記(1・2)の組合せ	22%
4. 依頼していない	4%
5. 無回答	13%

質問6．外部アーティストの出演(直近2～3回程度の実績でお答え下さい)

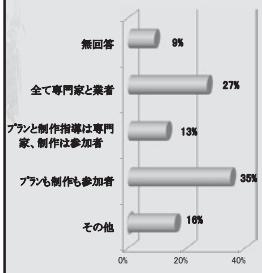


質問7．技術スタッフ(音響・照明)についてお尋ねします。
舞台技術を担うスタッフはどんな方ですか?

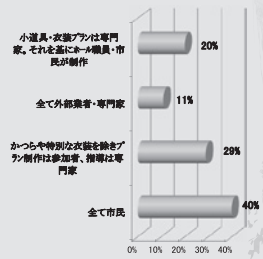
項目	46団体中
1. 主に会館(ホール)スタッフ	48%
2. 主にホールボランティア	2%
3. 会館スタッフのプランと指導でホールボランティアや市民参加者	7%
4. 主に市民参加者	17%
5. 主に外部技術スタッフ	26%

質問8．大道具・小道具・衣装等についてお尋ねします。

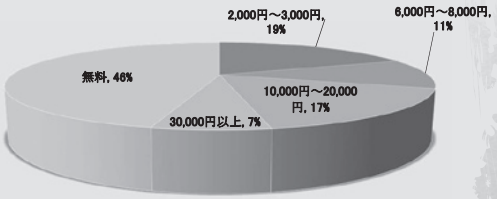
(1)舞台美術・大道具について、担い手は誰ですか?（複数回答可）



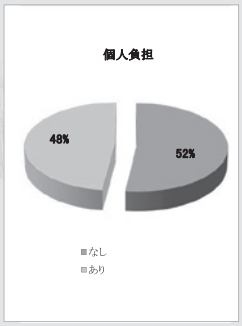
(2)小道具・衣装・かつら・メイクについて（複数回答可）

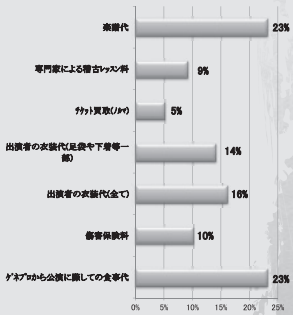


質問9．参加市民の参加費はどの程度ですか?



質問10．参加費以外の個人負担はありますか? ある場合の使途は何ですか?
(使途:複数回答可)





【運営の問題点や課題について】

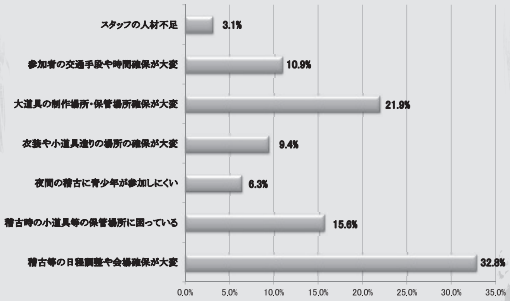
質問11. 参加者の課題について
（複数回答可）

項目	46団体中
1. 応募者が多すぎて絞り込みが大変	2.2%
2. 応募者が少なすぎて大変	10.2%
3. 応募者に女性が多く男性が少ない	17.4%
4. 応募者に年代の偏りが顕著	15.9%
5. 応募者が固定化傾向で新規が少ない	16.6%
6. 意識や技術に差がありすぎる	8%
7. スタッフの参加者が少ない	13.1%
8. 稽古やスタッフ作業への参加率が悪い	7.2%
9. リーダーが固定化し人材育成がままならない	7.2%
10. 近隣市町村等の公演日が近い	1.4%

質問12. 観客動員の課題について
（複数回答可）

項目	46団体中
1. 観客があふれ困っている	1.4%
2. 観客動員に苦労している	40%
3. 出演者でチケットを売らない人がいる	17.1%
4. 観客の世代に偏りがある	14.3%
5. 観客の多くが出演者の家族・関係者	21.4%
6. 公演内容により動員の差がある	2.9%
7. 特に困っていることはない	2.9%

質問13. 稽古・リハーサル・スタッフ作業の課題について。
（複数回答可）



質問14. 指導者の課題について。
（複数回答可）

項目	46団体中
1. 脚本家、演出家や指揮者が固定化しﾏﾝﾈﾘになっている	20.7%
2. 脚本家、演出家や指揮者のﾚﾍﾞﾙが低い	1.9%
3. 次の脚本家、演出家や指揮者が育たない	24.5%
4. 舞台監督や事務局長など舞台ｽﾀｯﾌや事務局の要が人材難	30.2%
5. 演出家や指揮者が遠距離あるいは経費面で常時指導に来れず｢レベル｣向上が難しい	3.8%
6. 優れた脚本家、演出家や指揮者を経費面で招聘できない	15.1%
7. 外部専門家とのコネクションがない	3.8%

質問15. その他運営面の課題について。
（複数回答可）

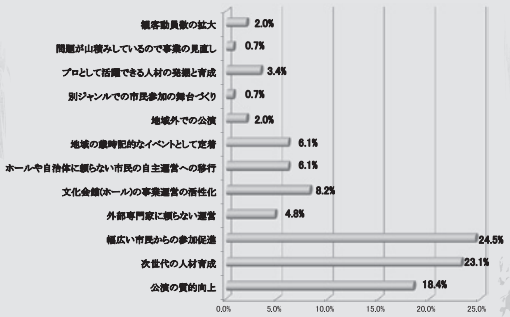
項目	46団体中
1. ホール職員、外部専門家やプロ業者、市民参加者の役割分担が明確ではない	6.3%
2. 演目の選定に苦労する	8.3%
3. 予算の制約で舞台美術や衣装が限定的になる	13.5%
4. ホール側の人員体制が薄く、市民参加者をフォロー出来ない	14.6%
5. 事務局の作業量が多く事務局の疲弊が激しい	24%
6. 地域や民間企業団体の協力が薄い	13.5%
7. 行政の協力が薄い	16.7%
8. 舞台美術や衣装制作のスタッフが少なく、外部委託も出来ないためスタッフの負担が大きい	3.1%

【効果と今後の展望について】

質問16. 市民参加の舞台づくりの効果としてあげられるものは何ですか?
（複数回答可）

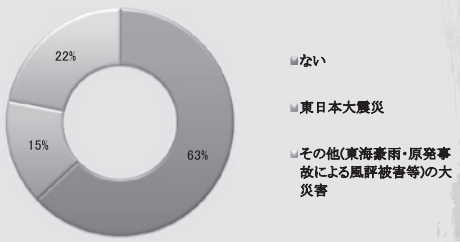
項目	46団体中
1. 市民が芸術文化に触れる機会の促進となった	21.8%
2. 市民の自主的な文化活動の育成となった	20.4%
3. 文化会館(ホール)と市民の交流推進が図られた	12%
4. 文化会館(ホール)の事業の活性化と運営能力の向上が図れた	2.1%
5. 地域の歴史文化の掘り起こしと舞台公演による発信となった	12%
6. 青少年の芸術教育や情操教育の促進となった	9.9%
7. 専門的な芸術団体(芸術家)の育成が図れた	3.5%
8. 人材育成と地域のコミュニティづくり(市民同士の交流)となった	18.3%

質問17. 次(将来)への展望として、考えていることは何ですか?
（複数回答可）

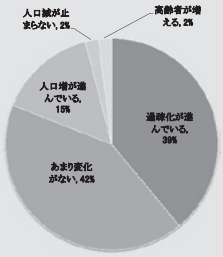


【大災害後等の効果と役割について】

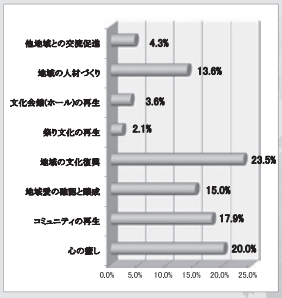
質問18. あなたの地域は、過去30年の間に大災害に見舞われたことがありますか?



質問19. あなたの地域は、急激な過疎化あるいは人口増が進んでいますか?



質問20. 市民参加の舞台づくりの大災害に果たす役割は何だと思いますか?
(複数回答可)



※市民参加の舞台づくりについて自由にご意見をお書きください

団体名	県名	ご意見
帯広市民オペラ	北海道	次回から市の財政支援がなくなると言われている。当団体の他に市民オーケストラ、文化協会、文化財団、市が主催してきている「市民オペラ」の取り組みは、支援頂いている道財団をはじめ界隈から高い評価を得ており、経済界も支援してくれている他市の範に倣える事業と自負している。地域の資源を活用しないで、市民と遠う方向を見ている市はどのようにまちづくりをしようとしているのかわからない。
金ヶ崎町民劇場	岩手県	来年度は第10回公演になります。今までスタッフとしてアクターとして中心的役割を担ってきた人達が第一線を退く様子です。10年を経過した劇団の運営に危惧しております。
奥州胆沢劇場	岩手県	ここ数年、参加者及び観覧者の減少が目立ち、全盛期のころにくらべると半分もしくは半分以下になっています。しかし、本劇場は33年の歴史があり、すでに34回目もスタートしていることもあって、簡単に幕を下ろすわけにはいきません。そのような状況の中で、いかに盛り返し、地域づくり、人づくりに結びつけていけるかが、当面の課題だと思っています。そういった事で、プロかちの意見なども聞きたいので、情報交換会のようなものがあると助かります。
一関藤沢市民劇場	岩手県	演劇は総合芸術である。全て市民がつくる手づくり舞台は、地域の歴史や文化、その時代のテーマを自由に再現するとかっくりあげる絶好の機会であり、内外に向けて情報発信できるものである。公演を観ることも大事であるが、物事を作り上げて行く過程も大事なことである。市民も行政も、このことを理解し、支援だけではなく、協力すべきと思う。
矢巾町民劇場	岩手県	市民参加舞台づくりをしている団体全てが交流し、いろいろな意味で質が上がるような場をもうけ、県全体の芸術文化が盛り上がるといいなと思います。閉鎖的ではなく、もっとつながりが出来れば視野も広がっていくのかなと思います。素晴らしい活動をしている団体が多いので、団体同志のコミュニティづくり、人材づくりになっていくといいですね!

団体名	県名	ご意見
銀河ホール演劇部	岩手県	このアンケートにおいても「公演」を前提とした市民劇のモデルで検討が行われていると思うが、昨今の趨勢でも求められているようにホール・劇場においては「新しい広場」「コモンズ」としての役割が問われていると感じている。その観点から、当館においては「公演」以前に「創作活動」を重視し、文化芸術に対する欲求をもった市民の活動の広場をつくることを目的とした事業展開を図っている。現実問題への対応は放置しならない問題だが、県内市民劇に関しては、理念面において見直しを図る必要を感じる。
一関千厩地域市民劇場	岩手県	過去14回の上演により地域に定着し楽しみに毎年来演の方々もあり、期待されていると感じますが、演劇参加者の練習時間の確保が現役世代の場合、年々厳しくなってきました。実行委員会を立ち上げますが、制作・運営・上演のすべてを、どっから座会員が行います。公的機関は、一回市からの補助金のみです。もう少し社会が関わって人的支援があれば、広報活動とか効果があると思います。始まりは町・衣装の運営でしたが、一関合併以降はすべての運営を民間団体で。
かまがや市民創作ミュージカル	千葉県	予算がない為、小道具・衣装を手作りする事が多く、その分時間と手間がかかってしまう。(ボランティアとホール職員とで一緒に作成) ・社会人や学生の参加が多いため、稽古日程があわず練習が進まない。 ・子ども達の保護者からは積極的に物事を取り組むようになったので、今後も続けてほしいとの希望あり。
いちかわ市民ミュージカル	千葉県	何より「面白いこと」が第一義です。「面白い活動は人を皆を元気にする」がモットーです。2001年の市民ミュージカルづくりから発展して、様々のサークル・舞台活動が誕生して、活動を楽しんでいます。
調布市音楽連盟	東京都	ママさんコーラスから、オペラ(プロ・ソリストの参加もあり)大学のオーケストラなど、多様な参加の音楽祭を62年続けています。最近、小・中学生の参加が減少しているのが心配です。指導者(教員)の意向によって力の入れ方が大きくちがってしまうのは問題と思います。調布市民の団体が中心ですが、近隣市町村の団体も加盟可です。音楽祭は音楽連盟加盟団体と公募団体で2:1の割合で実施しています。

団体名	県名	ご意見
調布市民オペラ振興会	東京都	一年おきにグランドオペラとコンサート形式の「オペラ・オペレッタ」を行っています。オペラは経費が莫大なため、スポンサーに苦労しています。その為年に一度なのですが、その間に団員が辞めてしまうのが悩みです。全国でもオペラ専門の団体は少ないので、調布市でも文化活動の目玉としてバックアップしてくれています。桐朋大学も市内にあるため、音楽の機会としては恵まれています。
みき演劇セミナー	兵庫県	今年で22年行っており、当初より自主的にかつ地域の歴史を芝居にする事を目指していた。現在では全てが順調に進んでいる。
ささやま市民ミュージカル	兵庫県	幅広い年代の生きがいづくり、交流には最適な事業であるので、積極的に活動している所同士のネットワークが組めれば、情報交換等出来るのでありがたい。
島根第九をうたう会	島根県	事業のプロデューサー的な役割を果たす人材の育成に苦労しています。継続していくためには総合的な判断ができるリーダーの育成が不可欠である。
ホルトホール大分	大分県	2017年11月4日、ホルトホール大分にて「地域創生ミュージカル・フォーラム」を開催しました。市民ミュージカル活動の地域ごとの歴史や目的、課題などを共有する会で、愛媛(松山市)、岡山(倉敷市) 高知(高知市) 長崎(大村市)と大分(大分市、佐伯市、国東市、九重町)が参加しました。他地域の活動状況を共有できる機会はなかなか無いので、次回開催を別の地域で引き継いでくれたらと期待しています。
九重町民劇場	大分県	仕事や家庭の協力が必要なため、参加者自身の意識が変わる。舞台の上では、子どもも大人も関係ないため、子どもの成長が手に取るように分かる。学校等に居場所のない子ども達を引き入れることで、その子等の心の安定を図ることができる。

V 現地の声

ジュニアアンサンブルみやこの活動について

佐　藤　葉　子

ジュニアアンサンブルみやこはH 27年６月に開講し、H 30年度で４年目に入る。現在、小学１年生から中学２年生の団員19名が月に３～４回のレッスンを受け、年度末の３月には第３回発表会を開く予定である。１年目の発表会は演奏できる曲目も少なく、宮古市民文化会館の展示室で20分ほどの発表だったが、今年度は子供たちだけで演奏できる曲目も増え、１部では大人のエキストラの入らない演奏、２部ではゲストに県内のジュニア・オーケストラや宮古市出身者を招いた独奏、３部では地域の大人やいわてフィルハーモニーオーケストラとの共演といった内容に拡大し、大ホールでの発表会を予定している。

H 29年９月には県民会館で開催された第１回いわてジュニア・オーケストラサミットに宮古からも３名が参加し、他団体との交流を図り刺激を受けて帰ってきた。

また、これまでにいわてフィルハーモニーオーケストラを始め、大阪交響楽団や日本フィルハーモニー交響楽団の団員の方々、そして、宮古出身のBBCスコティッシュ交響楽団副コンサートマスターの伊藤奏子さんからもクリニックを受ける機会を頂けたことはとても幸運であった。子ども達がその度に刺激を受け、メキメキと上達していく様は、本物の芸術に身近で触れることの大切さを教えてくれる。

練習風景

毎年、新入団員は、楽器の中でも技術的に難しいとされるヴァイオリンを構えることから始まり、音を出し楽譜にある音符を奏でることが出来るようになるまでは容易なことではない。楽器を構えることだけでも大変、ましてやきれいな音を出すとなると、継続してしかも反復した練習が必要となる。私が指導者として子ども達に会えるのは月に１～２回程度だが、子ども達の「きれいな音を出せるようになりたい」「お兄さんお姉さんが弾いている曲を弾いてみたい」、という熱意をいつも感じる。３年目になり、１期生が３期生の子ども達を指導したり、一緒に演奏して支えたりする姿が見られるようになってきた。現在、月３～４回のレッスンのうち、講師が指導できるのが２～３回、他はボランティアにみていただき、できるだけ継続して何度も練習できる機会を設けているが、現状ではグループレッスンだけで、基礎的な技術を個人的に指導できずにいる。来年度からは、個人レッスンもできるようなカリキュラムを検討中である。個人レッスンとなると、最低でも一人15～30分の時間を要し、継続的な指導時間や回数の確保が課題である。他団体ではあるが奥州市のジュニア・オーケストラでは週に２回のうち１回は個人レッスン、１回は合奏練習という内容になっており、個人個人のスキルがどんどんアップし、技術的にもレベルの高いものになっている。ジュニアアンサンブルみやこでも週

に２回とはいかなくとも、月１～２回の個人レッスンの時間を設けるために、講師陣の来訪回数を増やし、子ども達の意欲に向き合った指導をしていきたいと考えている。

もう一つの課題は楽器についてである。子ども達は身体の成長も早く、ヴァイオリンは体のサイズに合わせて楽器も変えていかなければならない。現在、個人持ちの楽器は１台のみで、他はいわてフィルからの貸出品である。弦や弓の毛など消耗品もあり、楽器の管理も必要となる。現在無償で貸し出ししているが、今後は管理費の捻出のため負担金を検討しているところだが、各家庭で月々の月謝にプラスして自己負担となると苦しいご家庭もあることを考慮してほしい。

来年度も大阪交響楽団などのクリニックが予定されており、子ども達の更なる成長が期待される。しかし一方で、中学生から高校生になると、学校の勉強やクラブ活動との両立などで、レッスンに通うことが困難になる場合も予想される。せっかく中学まで継続してやってきても、一時中断してしまうと、大人になってからの活動にはなかなかつながらないと懸念される。先日宮古で初めて開催された市民劇などで、市民によるオーケストラでの生演奏があったが、今後このジュニアアンサンブルみやこから演奏者が出ることもそう遠くはないと思われる。「継続は力なり」少しでも長く続けていけるように指導体制を整えることが音楽文化の復興支援になると思われる。

ジュニアアンサンブルみやこ

2018年1月に行ったワークショップを通して

小 林 健 司

東日本大震災から７年、徐々に整備が進み復興の足音が聞こえてきた宮古市田老にて「ふるさとの海でとれる魚を自由に表現しよう」というワークショップを今年１月５日と６日に田老公民館にて開催した。

実際に宮古市田老の定置網でとれる魚を見て触って描くワークショップだ。

沿岸に住む子供も店でパック詰めされた魚しか見たことない子供や、魚に触る機会がない子供もいる事から、身近な海で取れる知っているようで知らない魚を直接触って自然の形態を描こうという趣旨で行った。それと同時に三陸沿岸にはどのような魚がいて、どのような方法で漁が行われ私たちの食卓に並んでいるのか、１匹の魚の背景を探りながら見て触って三陸海岸の恵みを知ろうとするワークショップだ。

ワークショップを行った宮古市田老は大震災の際、津波により壊滅的被害を受けた場所だ。私の生まれ故郷でもある。震災という未曾有の事態から徐々に立ち上がっていく中で、海は今でも私たちに恵みを与えてくれる。この恵みと震災を経て感じる心模様が海で働く人々の姿もワークショップに取り入れたいと考え、ビデオカメラを持ち実際に漁の様子も取材した。

取材を行う前は震災と海の恵みを同時に感じるような取材ができればと考えていたのだが、実際に取材を進めると、あまりにも静かな海の姿にそのまま自身の身を委ねる取材に変化していった。私の複雑な感情とは裏腹に海の様子は震災前と何ら変わりはない。７年という歳月が普段通りの姿にさせてるのかもしれないが、この何も変わらない何も無かったかのような海の姿に、自然はいつでも私たちに恵みを与えてくれると静かに感動した。

それと船に乗って驚いたのだが、夜の海はとても綺麗で美しかったという事だ。実際船に乗り込むまでは、真っ暗な海に船を出すのは怖いと恐怖感を抱いていた。しかし、いざ船に乗り込み出船となるとライトが煌々とつき漁港の水面を深く照らしエメラルドグリーンが白い水しぶきとなって船が進む。始めに抱いた恐怖感は何処へやら、水面を照らすライトと深く反射する水面。夜の海はとても美しい。

そんな夜の海だが少し賑やかでもある。考えれば当たり前の事だが海で働いているのは私の乗り込んだ定置網の漁船だけではない。沖にも岸沿いにも漁をしている船がいて、遠くに見える船は真っ暗闇に小さな町があるかのように「ポッと」明かりを灯している。そのような船が何隻かいてとても綺麗に輝いているのである。そして空もまた星空が美しく、まるで宇宙空間を漂っているような気分に浸れるのであ

（左から）森吉氏、小林氏

る。今からこの宇宙空間で網を起すとは考えられないほどの光景が広がっていた。

漁の様子だが、定置網を仕掛ける場所というのは先人達が試行錯誤しながら魚が入る場所を探し開拓してきた歴史ある場所にあるということだ。どこに設置しても魚が取れるということではない。私が取材した12月後半は、漁獲量が少ない時期との話であったが回遊魚や根魚等、多種多様な魚がとれた。漁師は網を起し終えると手早く船上を整理整頓し綺麗に保っている。船上が散らかった状態なら事故に繋がりかねないから綺麗に保っているのだと仕事を見て感じる。とても手際よくスピーディーに漁が行われ毎日網を起す大変さも同時に実感した。

この実際に定置網漁船に乗って取材を行ったものはワークショップで上映した。

この映像を見て子供達はどのように感じたか分からないが、お店に並んでいる魚の背景を感じてもらえたら嬉しい。

肝心のワークショップだが、前日と当日に定置網で取れた魚を用意し行った。

東京から作家の森吉健氏も呼んで描き方のデモンストレーションや絵の具の使い方、物をみる際のポイント等、普段気づかないような部分まで丁寧に説明いただいた。

森吉健氏のデモンストレーションではリアルな描写に子供達はもとより大人も私も真剣に見入った。

魚の観察

魚は10数種類を準備し中には見たことのない暖流域の魚も数匹混じる。

魚は実際に触って感触を確かめて描いて行く。魚のゴツゴツした頭の感じや張りのある背中側、柔らかな腹側、ヒレの数や違い、口の中の様子や体色の変化等。じっくり観察してから描いていく。魚を触るのが怖いという子供もいたが徐々に触れるようになり、手に持って不思議そうに観察していた。

実際に描くものを触るというのはとても大切な事である。私自身も物を描くときはその素材の質感や量感といった部分を触って確認している。視覚のみからの情報だとその物体の裏側や側面を感じ取れない為である。学生の時、先生から教わった「見る、観る、視る」様々な「みる」事についてを思い出す。この見る行為は触る事でかなりの部分をカバーできる。見る行為というのは実際に感じとる事であり、私が実際に漁船に乗り感じとった事も「みる」行為であった。

様々な視点からものを見つめその関連性を知ったり、直接自然の形態と触れあったりする当たり前の行為そのものが、とても重要であると今回改めて確認することができた。この「感じとる」「みる」行為の先に新たな思考や発想が生まれると確信するワークショップとなった。

このワークショップであるが全３回で構成されている。次回の３回目のワークショップは３月に行われる。３回目のワークショップでは新たな発想という視点で粘土を使い、新たな魚の形態を作り出す。この原稿を書いている現在は２月であり、３月のワークショップではどのような作品と出会えるのか今とても楽しみにしている。

１月に来てくれた子供達がまた参加するのか今現在のところ不明ではあるが、自然の形態か

ら感じとった感触を忘れずに取り組めれば、必ず興味深い作品が作り出されると思うので頑張ってほしい。

最後にこのワークショップを行うにあたって支えていただいた「いわてアートサポートセンター」の長内氏、藤原氏、作家の森吉健氏に深く感謝いたします。そして参加してくれた子供達にも感謝いたします。

子どもたちに絵画の指導をする小林氏

みやこ市民劇について

佐々木　芳　江

「宮古の文化を底上げしたい」

みやこ市民劇の発足の専門部会で、坂田裕一理事長が言った。

『底上げ』という言葉が、直球ドストライク。おまけにテクニカル講座での舞台技術者の格好良さ。なんて素敵なの。自分も劇を一緒に作りたい。歌と踊りと演奏の、煌めく共演に妄想をめぐらした。

しかし、だ。ノーテンキに希望を膨らませた私を待っていたのは、劇のキャストスタッフの一般応募が二十人にも満たないという驚くべき困難な現実だった。

どうやって劇を完成させたらいいのだろう。

もはや後戻りできない。やるしかないじゃないか。館長とともに半ば強引な一本釣り作戦決行である。

ツルハシをふるう鞭牛和尚と茂助のように、ただひたすらに。

そして、ようやくキャストとスタッフが揃った。やっと揃ったはいいが、参加者が稽古に出て来られる日はまちまちであり、欠席者が多いほど、穴ぼこだらけのお粗末な稽古しかできなくなる。大ホールでの通し稽古に入ってさえ台本を離せない人、プロンプターなしではセリフが出てこない人もいた。

そんな状況を演出家は許さなかった。

素人だから仕方がない、とは妥協せず、マナーを守ることを約束させただけではない。恐ろしいほど厳かに「これからは一切、台本を手放してください」と言い放った。

それからの稽古は一変した。セリフを覚えていない役者が詰まった時の緊迫した沈黙。それでも中には、自分の失態を冗談でごまかそうとする役者がいた。そういう不真面目でいい加減な役者には、演劇を愚弄し貶める者として冷ややかな怒りの双眸で圧倒した。

演出家の気迫におののくキャストスタッフは、誰もが、いつの間にか真剣になっていた。音響も照明も衣装も小道具も４か月の間、ほとんど休む暇なく全力疾走してきた。大道具もプランが出来てからの追い上げはすごかった。みんな疲れてへとへとなのに、それでもクオリティを高めるため、演出家のダメ出しにすさまじい結束力で応えていく。

舞台上で手をつなぐ出演者とスタッフ

そして、本番の日。

それまで阿修羅のようであった演出家は、阿弥陀様のように柔らかな笑顔をキャストスタッフに向けた。

楽屋でメイクをしている役者の楽しそうな

笑い声。

緊張していないわけがないのに、どの顔も晴れやかなキラキラしたいい表情をしている。

本番直前『気合い入れ』を行うために、キャストスタッフを全員舞台上に集合させた。車座になり隣の人と手をつなぐ。

実行委員長と演出家から話される言葉を、皆、無言で聞いていた。

最後に、白石舞台監督の掛け声で全員立ち上がり、肩を組んだ。

「絶対、成功させるぞー！」

「おおー！」

100 人以上のキャストスタッフの魂声が、共鳴しあい大ホールに響き渡る。

きっといい劇になる。この劇は大成功する。

演出家の隣に座って舞台を観るよう指示されていた私は、インカムなしで幕が上がるのを見た。

山賊に追われて、扉から飛び出し、駆け出す鞭牛と茂助とお松。

鞭牛に喝を入れられて、コケてコロコロ転がる小坊主たち。

洞穴に探りに来る役人と赤マムシをかくまう鞭牛との心理的攻防。

転がってくる岩に足を挟まれる権太、それを助けようとする村人。

小坊主たちは「こども劇団みやこデイジー」

今まで稽古してきた中で、誰もが一番いい演技をしていた。

あっという間の三時間であった。

とめどなく涙があふれ出てくる。止めようとしても。止めようとしても。観客の割れんばかりの拍手と喝采に、涙が止まらない。

「やーい、やーい、泣き虫」

隣に座っていた演出家が笑って言った。

「なんちゅう人ですか。もうちょっとほかに言い方がありますでしょうに」

脚本家も私も、つられて笑い出した。

笑いながら、演出家が心から安堵しているのだと感じ、胸の中で、お疲れさまでした、と呟いた。

演劇は人と人を繋げてくれる。みんなで一つの作品を創造する苦しさを共有することで、出来上がった時の喜びはひとしおとなる。

第一回みやこ市民劇は、間違いなく市民にとって心の財産になったのだと確信している。

「宮古の文化を底上げしたい」

あの言葉にまんまと乗せられて、えらい目にあった。

けれど、あの言葉がなかったら、こんな感動を味わうことはできなかっただろう。

「次の劇は、○○をやりたいと思っているんだが、どうだね」

終わったそばから、もう次の話。

げんなりした表情の私に、横から、脚本家が面白そうに言う。

「三か月もすればまたやりたくなるから、大丈夫」

まったく、とんでもない人たちと出会ってしまったものだ。

けれど、今、人生が楽しいと心から思える。

宮古の文化の底上げをしようよ。

今度は私がみんなに呼びかける番だ。

最後に、数々の落ち度がありながら、ご寛恕いただき、お導きくださった、いわてアートサポートセンターの本部の皆様に心より感謝を申し上げたい。

舞台上での記念写真

歌集「いわて震災詩歌2018」の選考に当たって

岩手県歌人クラブ会長　八重嶋　　勲

昨平成29年５月、岩手県芸術文化協会の総会の折に、ＮＰＯ法人いわてアートサポートセンターの坂田裕一理事長から「東日本大震災の短歌の募集をしたいのでその選考等に協力してほしい」と耳打ちされた。

坂田氏とは、私が盛岡市教育委員会事務局総務課に在職していたころにご一緒した。平成３年から７年までである。坂田氏は新築当時の盛岡劇場の事業係長として勤務していた。平成８年に人事異動で市長部局観光物産課観光係長に転任した。坂田氏は、市職員の傍ら演劇で活躍しており、私は、岩手県歌人クラブの幹事・事務局員であった。

坂田氏は、「啄木風短歌」の全国募集を計画し、その相談にのったことがあった。私は、浪漫派の歌誌「北宴」主宰の高橋爾郎氏を紹介。その後、歌誌「コスモス」同人の柏崎驍二氏にバトンタッチされた。平成18年、「啄木風短歌」に替えて、「全国高校生短歌大会」通称「短歌甲子園」を実施。私は第２回から昨年度の第12回まで関わってきている。

平成29年７月25日、いわてアートサポートセンター「風のスタジオ」で第１回目の相談があった。池田克典（前岩手県文化振興事業団理事長）・斎藤純（作家）・吉田史子（岩手県歌人クラブ幹事）・八重嶋勲（岩手県歌人クラブ会長）。（後、この４人が選者を務めた）。主催の坂田裕一理事長、村岡邦子担当の６人で協議。歌集「いわて震災詩歌2018」の募集要項を作成、各方面に発送したのであった。その結果、98編の応募があった。

東日本大震災は、平成23（2011）年３月11日（金）午後２時46分、突如として起った大地震。宮城県の牡鹿半島の東南約130キロ沖震源のマグニチュード9.0の巨大地震は、想像を絶する大津波となって岩手、宮城、福島三県をはじめ東日本の沿岸を襲い甚大な災害をもたらした。多くの港町を壊滅させ、多数の市民が犠牲となった。さらに、福島では、約14ｍの津波に襲われた東京電力福島第一原子力発電所の爆発事故が発生、放射能が漏れ出し広く飛散して、多くの市民が避難、長年の移住を余儀なくされた。セシウムなどの放射能汚染は、長く消ゆることがない。死者・行方不明者２万１千人。

岩手の被害状況は、死者・行方不明者7,413人、避難者49,020人、倒壊家屋19,773棟、瓦礫推定583万トン。遡上高39.9ｍ（宮古市姉吉）、地盤沈下84cm（陸前高田市）、浸水率52％（大槌町）。漁船被害は、県内登録約14,300隻中5,726隻流出、使用不能。防潮堤は、総延長39.4キロの約64％にあたる25.3キロ損壊等の大災害となった。（岩手日報社　2011年６月11日発行　「平成の三陸大津波」より抜粋要約）。

（左から）坂田氏、吉田氏、八重嶋氏

しかし、震災後６年経過した今、次第に記憶から薄れてきていることは事実でかなしい思いである。こういう時だからこそ今の心境や回顧を記録に留め、永く後世に伝えることはとても意義深いことである。

昨年 12 月 19 日、選者会議を開き、最優秀作品１編、優秀作品 10 編、入選 19 編、佳作 14 編、一首選 11 首を選んだのであった。

最優秀作品「地震のあと」中村ときさんの作品は、97 歳の作者が、津波に遭遇した事実を回顧し、今なお行方不明の姉、甥を哀れみ、昭和、チリ地震、平成の大津波体験の心境を表し、しかも新宅に老いの日を積み希望をもって生きようという意気込みが感じられる。勿論選考委員全員が推した。優秀作品の一席「家族写真」藤井永子さんの作品も選考委員全員が推した。津波にのってわが家に迫ってくる大型船は恐怖を感じさせる。写真にまつわるいとこ、祖母の思い出、祖父の作るころ柿の記憶のふるさとの家が今はないと寂寥感を表出している。二席から六席までは、３人の選考委員が推している。二席「糶市」千田マス子さんの作品は、肉用牛の飼育を業とする作者が、強震に脅える牛、震災の影響、セシウムの風評被害など内陸で感じた震災をテーマとしたところが特徴的。三席「浜人」斎藤陽子さんの作品。甥が津波襲来に言い伝えどおり船を沖に出し、船もろとに波に呑まれた様子を率直にいって悲しみがにじみ出ている。四席「仮住ひ」佐々木政子さん。陸前高田で被災後一関に仮住い中に夫君を亡くした。仮住いの惨めさを、書道、カラオケに気持ちを紛らわす様子は切ない。五席「友」山本豊氏。津波に行方不明となっている友を思い眠れず、眠れば夢に顕つ無言の友。時には海に出かけて偲ぶ様子は切々として読み手に訴える。六席「ふる里」加藤信子さん。大津波に壊滅したふるさとを離れ、そして３年前に夫君逝去。今なお限りない思郷の気持ちが伝わる作品である。以下の作品も選考委員が２名ないし１名が推しており、選考委員会議でいろいろ協議して選出した作品であり、それぞれ内容が重く、切実な短歌作品であった。

時宜に適したこの事業を主催されたＮＰＯ法人いわてアートサポートセンターに対して深甚なる敬意と感謝の意を表したい。

選考会の様子

Ⅵ まとめ

まとめ
「コミュニティの復活と語り継ぐ力」

特定非営利活動法人いわてアートサポートセンター　理事長　坂　田　裕　一

はじめに

震災から７年。

一昨年度は、生活基盤の復興整備が進む中、文化芸術における役割として『心の復興』を目指すために「伝える」「学ぶ」「交流する」「出かける」「新たに興す」の５項目について論述させていただき、昨年度は「伝える」「学ぶ」を継承し「育む」「出かけ交わる」「興し参加する」を加えた５項目で提言した。

「心のひだに強く張り付いた苦悩と失った命の叫びの向かう先を求めつつ、子どもたちが明日を信じて生きていくために、コミュニティを再生させるために、ふるさとに誇りを持ち続けるために、心の内なる叫びを共有するため」の文化芸術の役割を記したものである。

今年度も、昨年度同様、当法人の実践活動の中から新たに気付いたことを中心に、今後の展望を模索してみたい。刻々と変わるニーズに対応し、より強いコミュニティづくりと、次世代育成を展望し、「語り継ぐ」「広く深く学ぶ」「交流し育む」「参加し継続する」の４項目で提言したい。

語り継ぐ

昨年の平成29年3月11日、もりおか町家物語館で開催された「いわて文化復興支援フォーラム」では、震災公募詩の朗読劇（詩劇）に続いて、「震災と詩歌」と題して、元朝日新聞編集局長であり、小説家の外岡秀俊さんと、盛岡出身の詩人・城戸朱里さんによるトークが行われた。

そのまとめは次のような言葉で結ばれた。

「言葉で語り得ることと語り得ないことの境界については、語り得ないものに対して沈黙するのではなく、教訓や伝承を後世に引き継いでいく言葉の力が重要だ」

これは報道としての記録の役割のほかに、震災で起きた心の傷や痛手、葛藤などをより深くかつ多面的に「記憶の深層」に刻み、それを表層に現出させる文学などの文化芸術の大切な役割であるという示唆だ。

一昨年の岩手出身の12名の作家による震災短編小説集「あの日から」、昨年の震災詩の公募、今年の震災短歌の公募は、朗読劇や朗詠劇などをも通じて、大きな反響を呼んだ。

3月17日付けの岩手日報朝刊のコラム「展望台」で、千葉陽介岩手日報社学芸部次長は次のように記している。

> 『人の心をつなぐ文化芸術の力を肌で感じたひとときだった。東日本大震災から7年を迎えた11日、盛岡市で開かれた「3・11いわて文化復興支援フォーラム」で、短歌朗詠劇を鑑賞した。

震災に関する情景や心の動き、復興、暮らしなどを詠んだ短歌は、ＮＰＯ法人いわてアートサポートセンター（理事長・坂田裕一）が公募した「いわて震災詩歌2018」に寄せられた作品。朗詠劇では歌集に収録された入選作の一部が披露された。

４人の役者が語りかけるように、時には叫ぶように一語一語を紡ぎ、詠み人の喪失感や哀惜、希望を表現した。ジャズピアニスト鈴木牧子さんの情感豊かな演奏と相まって、シンプルな舞台に被災地の光景が重なった。

「不明なる姉と甥とを憐れみて津波後六年秋となりたり」「三度なる津波に遭ひて生きしわれ開かれ地に老いの日積まん」－。中村ときさん（山田町）の最優秀作品「地震（なゐ）のあと」は、津波の怖さと悲しみ、それでも前を向いて生きていく意志を感じさせる。劇の最後に声を合わせて朗詠され深い余韻を残した。

耳を傾けながら記者は、本紙の追悼企画「忘れない」で取材させていただいた遺族の姿を思い起こし、胸を熱くした。会場にいた多くの人が「震災を風化させまい」との思いを共有したことは間違いないだろう。大切な日に、価値ある体験をさせてもらった。』（千葉陽介）

（朗詠劇）３月11日　浜藤ホール

風化されつつある震災の記憶を忘れて欲しくないという被災地からの悲痛な叫びは、小説や詩歌、エッセイ、映画・演劇など文化芸術の力によってこそ、効果を倍加させることができる。

そしてなにより、こうした作品を語り継ぐことこそ大切なのである。文化芸術は、そのジャンルを越えて融合し、より効果的に伝えることができる。

岩手では、こうした企画はあまり多くない。仙台市では地域の出版社が中心となって震災をテーマにした「仙台短編文学賞」の公募があり、570篇を越える応募作品が全国から集まったそうだ。心の底に沈降した思いを浮上させるには文学の力は欠かすことが出来ない。同時に、その浮かび上がる思いを語り継ぐには、言葉や文字だけではなく、多様な文化芸術の力が必要だ。

平成30年度以降も語り紡ぐ活動は途切れることなく続けたい。

広く深く学ぶ

指導者不足、後継者不足は年を経るごとに深刻さを増している。

一昨年度の提言の中でも記載させていただいた下記の記述を今年もまた同様に記載させていただくことに心苦しさを覚える。

〜一昨年度の提言書から〜

「震災後のコミュニティ再生に大きく寄与し、被災者の心の拠り所にもなった祭りや民俗芸能も例外ではない。外部からの参加者や資金の支援がなければ、成立困難な祭りも少なくない。

被災地での高齢化と人口流失は、全国のどこより加速していると言ってよいだろう。華道・茶道・書道など暮らしに密着した生活文化から、美術・音楽・演劇といった芸術文化まで、人手不足は進行している。特にも個人レッスンを核とする表現においては、少子化と地域経済の脆弱性も相まって、指導者の生活基盤さえ弱体化させ、被災地において新たに指導者の道を歩むことを困難にしている。

指導者不足･後継者不足は「市場の力」「個人の力」では補いきれない段階に来ている。従来とは違う形での補強が必要だ」

この状況は少しも変っていない。当法人では、これまで、「ホールレセプショニスト」研修や舞台技術の市民向けワークショップを行ってきたが、効果は限定的であり、広く学びの場を拡充しなければならない。

公立文化施設や公民館は、発表の場であり学習の場であるが、ややもすると利用施設としての貸スペースの役割に重きを置く場合が少なくない、と従前から指摘してきている。勿論、貸スペースの役割も住民の自主的な発表の場、学びの場を保障するために大切である。同時に、積極的に住民の潜在的な文化ニーズを掘り起こす「学び」の事業を展開させることも重要である。

ここでは、学びの場の確保について、述べてみたい。

まず、学びを牽引する機関としてあげられるのは、施設としては、公立文化施設や公民館、団体としては各種の芸術文化団体があげられる。

公立文化施設は、ホール等を活用する際に必要となる専門的な知識習得や、アウトリーチといわれる文化芸術のホール外への出前をも行う文化芸術の教育普及活動を行う。公民館は、どちらかというと「講座」と「サークル」を中心とした活動となる。主に活動の入口を担う。

団体活動は主に３つに分けられる。１番目は「先生」を中心とした技芸の習得である。書道・華道等の暮らし文化から、美術・舞踊・ピアノ・弦楽器などの舞台芸術まで幅広く、一般的に「教室」とよばれる活動である。

２番目は、演劇やコーラス、バンドなどの団体活動である。ここにも演出家や指揮者などの指導者は存在するが、基本的に集団で目標を定め、集団の共同責任で創造活動を行う。

３番目は、地域の民俗芸能である。寺社や地域のコミュニティと密接な関係を持ち、伝承と継続に重きを置く。

それぞれが役割を担い、指導者は、時に公民館等の講座の指導者となり、「教室」の先生になるほど互いを行き来しながら参加者の継続学習をサポートする。

団体活動は、学校のサークル活動の実績にも左右される。熱心な教師のいる学校の部活から、地域の活動者が育まれることが多い。

こうした役割の中で、今、課題となっているのは、指導者そのものが地域に少なくなってきているということである。人口減と高齢化が進む中、「先生」を支える経済基盤も脆弱になり、指導者難は高校にも及び、演劇部すらないという学校が増えている。さらに、民俗芸能は後継者難が深刻化している。

ここで考えなければならないのは、これらの機関・団体・指導者がこの状況に、共通の課題として取り組んでいるのかということである。

従前のやり方に加えて、新たな展開が必要である。

ジャンルを越えた指導者による「教えの場」の確保の協議、公立文化施設と公民館や図書館などの社会教育施設の連携による事業実施、高校教師以外の指導者の学校招致と学校の垣根を越えた児童生徒の活動の場の確保、民俗芸能の担い手養成のための地域外や他ジャンルとの積極的な交流などが考えられる。

また、団体活動においては、ライバルの団体の育成も課題になる。地域にひとつの団体しか存在しないということは、参加の幅を狭めるとともに、切磋琢磨して創造性を高めることをも阻害する要因になりかねない。「教室」的な団体活動においても、それは同様である。積極的にライバル集団をつくっていくことも必要だろう。

交流し育む

震災後、復興支援や心の癒しのために多くのアーティストが被災地を訪れ、子どもたちに貴重な文化芸術体験の場を与えていただいた。美術・音楽等被災地以外では考えられないような一流のアーティストと気軽に交流できる体験をした。その貴重な文化芸術体験は、生涯、子どもたちの心のなかに生き続けるだろう。それが子どもたちの持続可能な活動のきっかけとなっていれば嬉しい限りだが、残念ながら、そうした例は決して多くない。

何故なら、文化芸術体験から活動継続への持続可能なシステムが立ち上がっていないからである。素晴らしく貴重な体験を活かして、フォローしサポートするまでの力を被災地自身に求めるのは酷である。

持続可能な育むシステムの端緒として、宮古市には平成27年度に、みやこジュニアアンサンブルが、28年度に子ども劇団が発足し、順調に活動が展開されている。

しかし、子どもたちの持続的な文化芸術活動を支えるためには、表現のノウハウばかりではなく、人間教育的な要素や、集団のきまりを学ぶことも大切になってくる。文化芸術の専門性ばかりではなく学校や地域との連携も不可欠である。同時に、多様な表現に子どもたちが触れ合える仕掛けも必要だ。

このため、子どもの文化芸術団体のみではなく、地域や公立文化施設・公民館などの活動の場の支援が欠かせない。

交流によって育まれるのは子どもの領域ばかりではない。大人たちの文化芸術活動にとっても交流は必要だ。

交流は次の３点からも考えられる。

① 地域間の交流（出かけ交わる）

地域間の交流の大切さについては、震災直後から提言してきた。

震災以前、内陸部と沿岸部の文化交流は薄かった。距離的難点が交流を疎遠にしていた。震災の支援活動によって交流は飛躍的に深まり、交通網の整備も進んでいる。しかし、支援活動が縮小しつつある中、交流自体も縮小する可能性もある。地域間の人的交流促進は欠かせない。

② 世代間の交流（ともに育む）

地域内の民俗芸能は世代間交流の最たるものだが、現代的な表現においても世代間交流は必要である。特に、集団で作り上げる演劇や伝承が欠かせない民俗芸能は、意図的に世代間交流をすすめる必要がある。

③ ジャンル間の交流（刺激し合う）

異ジャンルの交流も大切だ。三陸国際芸術祭はコンテンポラリーダンスと民俗芸能の交流から生まれた。さらに、他国との芸能交流も生まれている。「語り継ぐ」ことにも通じるが、震災からの記憶の発信は、文学や演劇人に委ねるだけではなく、住民自らが表現活動を外部に発信させることも必要である。震災直後は三陸沿岸に秘蔵されていた優れた民俗芸能が国内外に紹介され多くの人々に感銘を与えた。次に記述される市民参加劇も異ジャンル交流がしやすい機会である。異ジャンルの交流からより広いコミュニティが生まれ、地域の発信力も高まる。

総合的な交流も必要である。次の項目で述べる「市民参加劇」や平成29年度、岩手芸術祭総合フェスティバルは長年の盛岡開催から、県内各地の順次開催も行うこととなった。この中で相互交流が図られることを願う。

参加し継続する

岩手県内で実施される市民参加劇は、43年の歴史を誇る老舗の遠野物語ファンタジーのほか、北は二戸の市民文士劇から南は一関まで18カ所（隔年開催を含む）で行われていたが、本年２月「みやこ市民劇」が発足し19か所目となった。

本誌のアンケートでも、岩手県の市民参加劇（ミュージカル・音楽劇含む）が他県を圧して多い。市民参加劇は、自治体や公立文化施設が主催するもの、実行委員会が主催するものなど形式が様々だが、地域づくりを目的に、多様な市民が参加できる舞台づくりが、その要件となっている。一つの劇団が、市民を公募して自らの公演を行う例は、市民参加劇の範疇には入れない。

県内の実施する市民劇で、取りやめたというケースは稀である。参加５か所を順次公演する県北の「劇団カシオペア」公演は中止となったが、10年以上を経て、二戸市民文士劇として生まれ変わっている。

多くの町の市民劇場に通底しているのは、市民の「舞台に立ってみたい」という思いにとどま

らず、地域の中で暮らし、地域社会の中で、地域を元気にしたいという、市民参加劇の役割をしっかりと担おうという思いである。

沿岸地域では、市民参加劇が少ない。震災以前は、釜石以外では久慈市の「おらほーる」の市民劇のみだった。宮古では、過去に一度だけ劇研麦の会が主導し、市民公募型の劇団公演として実施したことがあるが、それのみで終わっている。指導者層の薄さと核組織が育たないことが継続できない理由のひとつだ。勿論、自治体や公立文化会館の働きかけの有無もあるだろう。

市民参加劇の役割として、昨年の提言で次のように記述した。

「参加する文化活動を継続させ、それをコミュニティの核とするために、祭り芸能が大きな役割を果たすことは、今度の震災後の祭り芸能への市民の共感で証明されている。しかし、仮設から災害公営住宅への移住、新たな造成地への住居新設によって、かつての地域コミュニティは離散し新たなコミュニティづくりが求められてきている。それには、地域に根ざしてきた祭り芸能以外にも気楽に参加でき協働してつくりあげる「もうひとつの祭り」を興すことが求められる。多くのジャンルが融合でき、いろいろな立場から参加が可能な市民参加劇は、「もうひとつの『文化』の祭り」でもある」

「もう一つの『文化』祭り」を継続するには、忍耐と努力が必要である。

宮古市の「みやこ市民劇」は実施に２年を要した。最初の１年は、関係者のオルグ（組織化）である。経験がないからこそ恐れるものはない、という猪突猛進型ではなかなか仲間づくりはうまく運ばない。

他市の市民参加劇の鑑賞から始まり、舞台技術講習会の実施、国の文化振興基金の獲得し、主要スタッフに経験者を依頼しても、市民公募を開始して、いよいよ始めようとする第一歩を踏み出すことがなかなかできなかった。広告協賛や観客集め、スタッフは集まるんだろうかという不安、公演の出来栄えへの不安などが胸の中に去来した。

（みやこ市民劇）２月10日・11日　宮古市民文化会館

２日間ともほぼ満員。他市町に決して見劣りのしない舞台。参加者と観客が一体となった感動が場内に広がった。この成果の大きな要因となったのは、やはり、参加者の「絶対いい舞台をつくるぞ！」という前向きの姿勢だった。失敗するかもしれない恐れで小さくなるのではなく、不安を元気で補おうとする集団の力がみなぎっていたからだ。

この成功は、次につながる。しかし、今度は、継続するためのノウハウを獲得し、それを実施することが望まれる。成功の果実は、苗を植え、剪定し、寒暖の影響を防ぎ、慈しんで育ててこそ、味わうことが出来る。その過程を担う人々が育つことが欠かせない。

今回は、市民文化会館が事務局となり実施にこぎつけた。しかし、次は、市民参加者と会館が手を携えて準備しなければならない。

継続のための方策を10項目ほど提起しておこう。

① 市民による舞台技術やスタッフワークの継続学習
② 地域素材に関する掘り起こしと磨き上げ
③ 出演者の基礎練習の継続
④ 市民メセナ（市民や民間団体からの資金援助）の確保
⑤ 公的助成金の申請
⑥ 文化会館内あるいは市内でのストックスペースの確保
⑦ 文化会館職員の協力体制
⑧ 市長等市内有力者の理解
⑨ 自由に集える場の確保
⑩ 市民参加劇をコミュニティとする市民の組織

おわりに

次代を担う子どもたちの育成、市民参加劇をはじめとする文化芸術によるコミュニティづくりと、岩手からの持続可能な思いの発信・語り継ぐ力は、これまでの私たちの活動の柱であり、今後も揺るぐことがない。

今回の震災短歌の公募で「震災の忘れむがため中断の書道に励む日々となしおり」（佐々木政子）という作品があった。思わずはっとした。私たちは「風化許すまじ」と活動を続けているが、「忘れたい」という切ない気持ちとも寄り添って語り継ぐ必要がある。
未曾有の大震災の傷はとてつもなく深い。

文化芸術とは何か？文化芸術の必要性は？と、たえず問いかけてみる。刻々と変化する被災地のニーズの中で、文化芸術は、予期せぬ役割を担うこともある。そんなとき、躊躇なく立ちあがることができる文化芸術でありたい。

この冊子は岩手県の「平成29年度NPO等による復興支援事業」の補助を受けた、
「文化芸術による新たなコミュニティ形成事業」で作成しました。

提言書　～いわて文化支援ネットワークの活動から～
『震災から7年　被災地に新たなコミュニティを生む』
平成30年3月
発　行　特定非営利活動法人いわてアートサポートセンター
〒020-0874 盛岡市南大通1丁目15-7 南大通ビル3F
TEL 019-656-8145　FAX 019-656-8146
Eメール info@iwate-arts.jp
編　集　　株式会社reto
印　刷　　杜陵高速印刷株式会社

特定非営利活動法人いわてアートサポートセンター